



JSPS London

NEWSLETTER

No.52
2017.02-2017.04



Scotch Whisky Distillery, Dufftown, Scotland

Contents

Japanese Articles

- P02. 巻頭特集 「第12回在英日本人研究者会議
英国サバイバルセミナー」講演録
- P12. センター長の英国日記④ 「日本の大学の研究インフラ-II」
- P16. 英国学術調査報告 「高等教育研究法が成立」
- P21. 在英研究者の者窓から 第11回 ロンドン大学
ゴールドスミスカレッジ 松本 直美
- P23. 英国の大学紹介(カーディフ大学)
- P24. 英国の大学紹介(シェフィールド大学)
- P25. ぼりーさんの英国玉手箱 ～英国人のテレビ事情～
- P26. 第5回 立命館セミナーシリーズ

English Articles

- P27. Pre Departure Seminar and Networking Evening
- P29. JSPS Programmes to Host Japanese Researchers
- P30. Events organised/supported by JSPS London
- P31. Voice! from Alumni member
Vol.7 Dr Felix Rösch
- P33. JSPS Programme Information

巻頭特集

「第12回在英日本人研究者会議 英国サバイバルセミナー」講演録

2017年2月22日に、在英日本人研究者(JBUK)を対象として英国サバイバルセミナーを開催しました。
イギリスでサバイブしてきた先輩3名の先生方のご講演を講演録にまとめてお届けします。

講演①:「イギリスでのPIポスト獲得について」

保明綾, Dr Aya Homei, Lecturer, School of Arts, Languages and Cultures, University of Manchester



はじめに

今日は「イギリスでのPIポスト獲得について」というテーマで、ポスドクを経てレクチャーになるための就職活動だけでなく、家族と研究の両立のコツについても教えてほしい、とJSPSからリクエストがありましたので、そういったお話をしたいと思います。どこまで皆さんの参考になるかわかりませんが、私なりの経験を活かして、私の軌跡を紹介しつつ、話を進めたいと思います。

まず簡単な自己紹介、私の軌跡を紹介します。学歴ですが、1998年に初めて渡英し、1999年にマンチェスター大学で修士号を取得しました。その後、2003年にマンチェスター大学で博士号を取得しました。このときの専門分野は医史学で、英語で言うとHistory of Science Technology and Medicine。科学技術史も入った広い分野で、人文学の立場から科学と社会のあり方などを追求する学問です。現在は、所属が日本研究というところなので、Japanese Studiesも専門分野とみなしています。

職歴としては、博士号を取得してから日本で1年間、非常勤講師などをしていましたが、2004年にマンチェスターに戻ってきました。医史学のResearcher Associate、いわゆるポスドクになりました。その後、2008年にケンブリッジ大学のニーダム研究所という科学技術史を専門とした研究所でResearch and Teaching Associateという職に就きました。ケンブリッジ大学で

初めて日本研究に出会いました。日本研究というのは、学生が日本語を勉強するための学科で、日本語を学生に教えることが中心となり、職員は日本についての研究を行っています。ケンブリッジ大学着任中に、2009年にWellcome財団のUniversity Awardの助成を受けました。Wellcome財団は医療や科学の研究に対して広く助成金を出しており、University Awardというのは専任のPIポスト獲得につながる助成金です。ケンブリッジ大学の職は任期付き3年間のポストだったので、こちらを1年間に短縮して、Wellcome財団のUniversity Awardを受け、マンチェスター大学に移りました。以前のポスドクのときは医史学だったのですが、マンチェスター大学では日本研究学科に所属することになりました。2009年から2015年はWellcome Research Fellowとして第3期のポスドクをやり、ようやく2015年からLecturerとして勤務しています。

ここで前置きなのですが、本日私がお話しする内容は、私自身の個人史で一般論ではない、ということです。よって、参考にはなるかもしれませんが、最終的には皆さんそれぞれ自分自身のスタイルを大切にしていきたいと思います。さらに前置きともう一点付け加えていただきたいのですが、私のキャリア構築にとって、人と運に恵まれた、というのは非常に重要な要素だったと思っています。これは私自身の能力や頑張りとは関係ないわけですが、運などの外的な要素もキャリア構築のためには大切だと感じています。

PIポスト獲得への道のり

今回、この講演を準備するに当たって、落ち着いて自分の軌跡を振り返ることができました。普段は、日々の業務に追われていて、なかなか自分の過去を振り返ることがないのですが、今回の講演は私にとっても貴重な機会になりました。その振り返りの中で、PIポスト獲得をテーマに考えてみると、私のキャリアは3つの時期に分けられる、と思いました。3つというのは、最初が院生時代、2つ目が長いポスドク時代、3つ目が研究員時代、これは今のLecturerにつながるWellcome Research Fellow時代のことです。この3つの時代について、ど

「第12回在英日本人研究者会議 英国サバイバルセミナー」講演録

ういった点が皆さんの役に立つか、ということ念頭においてお話ししたいと思います。

最初の院生時代ですが、後から振り返ってみて、院生時代にやっていたよかった、と思えることは査読論文の執筆です。分野によっては早い時期から査読論文を書くのが当たり前だと捉えられているかもしれませんが、人文学では院生時代に査読論文の執筆までなかなか踏み出せない学生が多いのです。しかし、私の場合は周りの雰囲気よかったのだと思います。周りの院生らが査読論文を書くのが当たり前といった風潮があったので、私も査読論文を書いて、PhDを取得したときには査読論文が1本出ている、という状態でした。これは後々、評価のポイントにつながっていたことを聞きました。

さらに、PhDコース3年目のときには次のステップにつながる人脈作りを始めていました。人脈作りといっても、学会に行き名刺交換して、という形式的なことではなく、私の場合は、実際に先生に会いに行きました。私は医史学、特にお産婆さんの歴史を研究していたのですが、関連分野にいる先生で、一緒に研究してみたいと思う先生には片端から連絡を取って会いに行きました。将来的にこういう研究をしたい、という話をし、何かプロジェクトはできませんか、と直談判に行きました。

もうひとつ、結果的によかったと思えることは、柔軟な対応をした、ということです。先ほど申し上げた通り、いろいろな先生に当たったのですが、PhD取得後、最終的には当時の自分の専門とは違った真菌学の歴史プロジェクトでのポスドク研究に従事することになりました。これはもともとプロジェクトがあって、担当教授がやってみないか、と提案してくれたことで成り立ったのですが、最初は専門が違うので、新しいテーマにチャレンジすることは確かに怖かったです。しかし、最終的には柔軟に対応しました。結果的には、そのおかげで、研究内容もテーマも拡大していったので、プラスになったと思います。人文学のPI職は研究に専念できるわけではなく、授業も大切な要素なので、幅広いテーマの授業を提供できる、ということは強みになると思います。そういう意味で、私の場合は、院生時代からポスドク時代につながる過程で柔軟な対応をしたというのが重要だったかと思えます。

さて、次のポスドク時代ですが、この時代はとにかく査読論文を書くことに専念しました。さらに人脈を広げることも力を入れました。ここでプラクティカルなアドバイスなのですが、

メールにはなるべく即答した方がよいです。当時の私がそうしていた、というのもあるのですが、今、自分がLecturerの立場になってみると、メールに即答してくれる人は、しない人に比べて気に留める率が高いかと思えます。メールに即答するのは礼儀でもあるし、自分にとってもプラスになると思います。

ポスドク時代はもちろん就職活動をしていたわけですが、ここで大事だと思うのは、「今」ではなく「次」ということです。PhDを取得して就職活動をしている若手研究者、当時は私もその一人だったわけですが、若手研究者は得てして「今」を強調しがちです。例えば、就職活動のためのプロポーザルでは「今、このような研究をしています」「今までこういうことをしました」「このような論文を書きました」ということを綿々と書くのです。しかし、今、審査する側になって知りたい点は、今ではなくて次に何をしたいのか、「今」の研究をもとにした「次」の研究はどういうものなのか、といった将来的ビジョンに関することです。ですので、申請書類において「次」の計画をしっかりと描き出せると素晴らしいのではないかと思います。面接でも、必ず「次は何をしたいのか」と聞かれますので、「今ではなく次に何をしたいのか」を前もって考えておくとよいと思います。

最後に、先輩や経験者に指示を仰ぐことも大事です。私の場合は、先ほど運がよかったと言いましたが、担当教授が経験豊富な先生だったので、いろいろなアドバイスを仰ぐことができてラッキーだったな、と思います。先輩や経験者は、それまでの経験がありますから、少しでもアドバイスを求めるのは、イギリスだけではなくて世界共通で重要なことだと思います。

30代後半の研究員時代に入ると、もちろん査読論文や共著論文の執筆もしたのですが、この時代のユニークな特徴としては、次のLecturerになるための準備期間をしていたという点です。PIポストを獲得するには、研究が素晴らしいことは当然なのですが、プラス・アルファとして、授業や日々の業務もできるように、ということが必要です。私の研究員時代で意識していたポイントは、「自分」ではなく「相手」ということでした。研究でも授業でも「相手」を意識するようになりました。

人文学の場合、往往にして給料は授業料から支払われていることを先輩達から教わりました。つまり、大学では主役は自分ではなく相手なんですよ、ということです。自分が何を研究で伝えたいのか、ということではなく、どうすれば相手に自分の言いたいことが伝わるのか、ということに専念しました。

「第12回在英日本人研究者会議 英国サバイバルセミナー」講演録

今もそれをモットーにしています。学生に自分の研究内容が伝わっているのか、学生が授業内容を理解しているのか、というのは、毎日心に留めています。

Lecturerとしてのやりがい

いろいろありますが、1つ目として、好きなことが仕事というのがこの職の醍醐味ですね。2つ目は、日々発見。毎日授業をやっていると学生からの指摘もありますし、自分が研究や授業で新しいテーマに取り組んでいると、日々発見があって面白いです。3つ目は新たな出会いの連続。毎年、新しい学生も入学してきますし、新しい研究を始めれば新しい出会いがあります。研究も授業も視野に入れた上で、このようなやりがいがあると思っています。

家庭と研究の両立のコツ

最後に、家庭と研究の両立のコツについて、私流の6つのコツをお話したいと思います。ここで前置きですが、みなさんの中には、例えば、ご両親の介護をしつつ研究をなさっている方もいらっしゃるかと思います。今回のお話に関しては、小さな子どもがいる家庭と研究の両立についてのお話に専念しますので、ご了承いただければ幸いです。さらに、このテーマに関しては、皆さんには皆さんご自身のやり方があると思いますので、ご参考までに聞き流していただければと思います。

1つ目は長期的視野に立つ、ということです。私の場合は、計画して子どもを作ろうとしたわけではないのですが、計画性のある方の場合、とりあえず子どもができる前に論文執筆と人脈作りを先にしておく、これは大事だと思います。2つ目は大きく構える。いろいろ計画してみても、一旦子どもを持って感じるの、計画は崩れて当たり前ということです。計画が崩れたときにどう対応するか、ですが、大きく、「でーん」と構えていれば何とかなるのではないかと思います。例えば、家は少々汚くても大丈夫です。子どもは何とか育ちます。愛情さえ与えていけば子どもは育つ、というのが保明家のモットーです(笑)。これに関連して3つ目は、計画性を持ちつつも柔軟な対応が大事、ということです。例えば、先週の話ですが、きちんと計画を立てた折に学校から電話が来て、子どもが熱を出したということで迎えに行かないといけないということがありました。こうなったときは柔軟に対応します。仕事を中断して、子

どもを迎えに行きます。子どもが寝ている間メールチェックだけはする、そういうふうに柔軟に対応するのも大事だと思います。4つ目は任せる、ということ。女性のなかでは、夫に子どもは任せられない、と敷居を高くしてしまう方もいらっしゃるかもしれませんが、しかし、任せられるところは全部任せる、夫が何をしようが任せたものは任せる、そういう態度が大事だと私は思います。5つ目としては、考えを変えてみる。子どもを持つことは研究にとっては足を引っ張るマイナス要因だと考える人もいます。確かに、時間的にはマイナス要因かもしれません。しかし、私の場合は、プラスに作用している場合もあると感じています。例えば、子どもに事象を説明することは案外難しいのですが、子どもが理解できるレベルで説明することを繰り返すうちに、論文が以前よりもすらすらと書けるようになった、と感じています。こういった風に考え方を切り替えてみる、というのもひとつのコツなんじゃないかと思います。そして、最後6つ目は、一過性だということです。子育てというのは一過性だということです。子どももいつかは大人になる、子育ては実はほんの数年間だけが大変なだけで、その後は何とかなる、ということですね。

こういうコツを述べたところで、終わりにしたいと思います。ご静聴ありがとうございました。



質問する参加者

「第12回在英日本人研究者会議
英国サバイバルセミナー」講演録

講演②:「研究の黒子の本音:プロポーザル評価、研究評価、
論文査読の現場から」

富山哲男, Professor Tetsuo Tomiyama, Life Cycle Engineering,
Cranfield University



はじめに

JSPSから最初に講演依頼があったときは、EPSRCのパネル審査員を経験しているからパネル審査の内情を説明してほしい、と言われたんですが、守秘義務がありますからあまり詳しい話もできませんので、今日はもう少し一般論として、いつも考えていることがありますので、お話ししたいと思います。

私自身は、東大にドクターまでいまして、オランダでポスドクを2年やって、東大に戻って15年、その後オランダのデルフト工科大学に10年いました。2012年にクランフィールド大学に来ました。(アドバイスですが、こういうことはしないほうがいいです。なぜかと言うと、年金がめっちゃくちゃになります。たまさかですが、基礎年金は日本とイギリスで通算できて、オランダと日本でも通算できるので、それで何とかカバーできるのかな。あとは上乘せ分ですが、3カ国にいて一番割りが合わないのは日本かな、という気がします。)

今日は、研究者そのものというよりは、雑誌のEditorやEditorial Boardのメンバー、会議のChairやProgramme Committeeのメンバー、Funding Agencyのパネルやレビュワー、それからプロモーションやリクルートのときの紹介状、レファレンス・レター(これはイギリスもかなり真剣に見ますが、アメリカは非常に厳しく見ます)、External Examiner、そういった私の経験からお話ししたいと思います。

External Examinerは、いわゆる論文審査で普通は他大学の論文の審査をするのですが、イギリスに来てびっくりしているのは、教育プログラムのExternal Examinerをやらされる。これが大変でひーひー言っています。

研究の黒子の苦労

審査や評価というのは、一言で言うと「鏡よ、鏡よ、鏡さん」なんですね。皆さんは鏡の前で「俺はこんなすごい発見をした」とか「こういういいペーパーを書いた」というような自慢をしているわけです。鏡の裏では、それを見ている人がちゃんとして、審査をちゃんとやるわけです。ある意味で卑劣なのは、審査者は匿名なので、まさに鏡、マジックミラーで、裏側で誰が審査しているかは見えない。雑誌によってはダブル・アノニミティで、査読者が読むときも著者の名前が消されている、著者も査読者が誰かわからない、という方法でやっているところもあります。でも、査読者に著者がわからない、というのは嘘です。普通、論文を書くときは、自分の書いた論文がレファレンスに並びますよね。だから、査読者は、レファレンスを見れば、その論文を誰が書いたか、少なくともどのグループに所属する人が書いたかはわかります。最近は査読者に渡すときにはレファレンスも消す、ということもありますが、消すとかえってわかっちゃうんですね。というわけで「鏡よ、鏡よ、鏡さん」なんです。

今日は、なぜ裏側の黒子の話をするかというと、我々が研究をしてペーパーを書く、あるいはプロポーザルを書く、それをレビューする人が必要になります。レビューを通して初めてアクセプトとなるわけですが、実は、今どういう状況になっているかというと、論文をたくさん書いたほうが勝ち、というシステムになってしまっています。その結果、どこの大学でも、大学院生のころから、どういうふうに論文を書けばいいか、どういうプロポーザルを書けばいいかを手とり足とり教えて、論文やプロポーザルを書く側の生産性がものすごく高くなっているのに、その審査をするレビュワーが追いつかない、という状況になっています。追いつかないというのは、単にレビュワーが足りないというだけではなくて、そもそもレビュワーが見つかりません。レビューを頼んでもみんな断ってきます。今は電子編集システムになっているので、断るのはすごく簡単になっています。昔は、断るのにも手紙を書かないといけなかったんですが、今はクリックひとつで簡単に断ることができます。「忙しい」の一言でみんな断ってきます。とにかくレビュワーを見つけるのが大変です。レビュワーが見つかって、引き受けてくれても、時間通りにやってくれない。返ってくるレビューもめっちゃくちゃ。皆さんもご経験があると思いますが、何の役にも立たないレビューが多いわけです。チェック

「第12回在英日本人研究者会議
英国サバイバルセミナー」講演録

ボックスに記入はあるけれど、コメントとしては「結論が弱いからもう少し書き直せ」という程度しか書いてない。エディターから見たら、これはダメ、これはOKだから通す、という判断に使えるからそれでいいんですが、著者から見たら何の役にも立たないレビューなわけです。そんなレビューだったら、そもそもやっても意味がない、という話になっているわけです。ですから、今、いわゆるピア・レビュー・システムが死にかけているんです。特にカンファレンスは最低な状態です。今、イギリスではREFがありますが、REFではカンファレンス・ペーパーは評価の対象に入らないので、みんなカンファレンス・ペーパーを書かないわけです。以前は、カンファレンスというのが大事で、カンファレンスで皆さんの前で発表してフィードバックをいただく、というのが大学院生の典型的な教育指導スタイルだったんですが、今は、カンファレンスに書いて出しても、役に立たないから、カンファレンスには出さない、結果としてカンファレンスにペーパーが集まらない。カンファレンスが死んでいっている、そんな状況が、少なくとも私の近くでは起きつつあります。

そんな状況なので、皆さんにお願いしたいのは、レビューを頼まれたら、ぜひ受けてください。若干、専門から離れていても、受けてください。ただし、一番大事なことは、本当に期限内に書けるという自信があるときだけ、引き受けるようにしてください。そうでなければ、レビューを頼む側としては、次のレビューワーを探しにいかないといけません。一番困るのは、引き受けてくれたのに期限までに書いてくれないレビューワーです。特にカンファレンスは開催日程が決まっているので、何月何日までに採否を決めないといけません。それに間に合わないレビューをされても困るわけです。ですから、できないならできないと、すぐに言うべきです。できないとすぐに言うのは、返事をしないまま放っておく、あるいは引き受けておいてやらない、というよりも百倍ましです。

雑誌のペーパーのレビューでは、ひどい雑誌だと、あらかじめ断られることを念頭において、最初から6人ぐらいにレビューを依頼します。全員から返事がなくても、6人に頼めば半分の3人ぐらいからは回答が来るから、それで3人は確保できる、そんなことをやっている雑誌もあります。カンファレンスの場合は、あまりに数が多いから、そういうことをやっているレビューの数が膨大になるので、2~3人に頭を下げて、レ

ビューをやってもらいます。リサーチ・カウンシルのプロポーザルだと、だいたい4~8人ぐらいに見てもらいます。プロポーザルを書く側がレビューワーとして3~4人の知り合いの研究者の名前を挙げて、リサーチ・カウンシル側が3~4人の外部のレビューワーを挙げて、レビューを依頼するわけです。プロモーションやリクルートのレファレンス・レターの場合は、応募する側が最低3人ぐらい名前を挙げて、あと2~3人は大学側で探す、ということが多いです。

こうやってレビューワーの人数をあげてみましたが、我々から見ると一番困るのは、レビューにこれだけの人の手間をかけている、ということをお皆さんが理解していない、ということです。つまり、1回論文を書いたら、3倍の人がレビューをやる、しかも2回、3回とループするわけです。レビューにものすごく手間がかかっている。もちろん研究そのものが一番手間がかかるわけですが、それにも増して、査読する方もそれなりに手間をかけている。そこも考えてあまり論文の量産はするな、と言いたいですね。私、以前に、フェア・トレードではないですが「フェア論文制度」というのを作ったらどうか、とエルゼビアに提案したことがあるんですが、彼らは出版すればするほど儲かる仕組みになっているので、そっぽを向かれました。冗談ではなくて、そういう状態になっているんです。

それに、レビューのクオリティーそのものが、まちまちなので、これを揃えるのが大変なんです。マルチプル・クエスションになって「タイトルはどうですか」「アブストラクトはどうですか」と項目が並んでいるものはレビューも簡単なんです。そういうレビューは粗すぎて、あまり役に立たない。エディターからすると、そういうのは一番ラクなんです。読まなくていいし、結論だけ見て、「はい、OK」「はい、ダメ」とやればいい。でも、著者にとっては役に立ちません。いい加減なレビューというのは、世の中にいっぱいあるんです。それから、Conflict of Interestの問題もあります。普通は、Conflict of Interestがある場合は申告してください、となっていて、ポジティブなConflict of Interestはみんな正直に言うわけですね。この著者は昔、私の研究グループにいたのでレビューはできません、というように。ただ、中には、ネガティブな悪口を書くために、意地悪をするためにConflict of Interestを隠して否定的なレビューをする人がいます。これには気をつけないといけません。

そもそも、我々はレビューの書き方をどこかで教わったか、

「第12回在英日本人研究者会議 英国サバイバルセミナー」講演録

あるいは勉強したか、という、自分も含めて、何もやっていないわけですね。でも、これを真面目にやらないとピアレビューというシステムそのものが成り立たなくなります。ピアレビューがいいかどうか、という議論もありますが、そういうことも含めて、ピアレビューというシステムそのものの存亡に関わる話です。真剣に考えないといけない話だと、私は思います。

もうひとつ気にくわないのは、出版ということを考えると、レビューワーはタダで査読している、もちろん著者もタダで書いている、エディターも基本的にはタダです。雑誌によっては報酬を払ってくれる場合もあるがスズメの涙であって、それで生活はできません。ところが、Publisher(出版社)や、一番けたくそ悪いのはPublisherの上にさらに乗っかっているWeb of ScienceやScopusのような論文データベースを作っているところですが、彼らが一番、儲かっている。商業的にやっていて、儲かっているわけです。

これが変わる可能性があります。皆さんが論文を書いて、レビューワーが3人いて、一人のレビューワーが論文を読んでレビューを書くのに4時間かかり、レビューを2サイクルやるとします。そうすると単純に計算して全部で24時間かかります。これはかなり膨大な時間ですよ。これでアクセプトされればいいんですが、これで落ちてしまうと、レビューにかけていた時間はなんだったんだ、ということになる。レビューをやれば、それをひとつの業績として考えよう、という話はないわけではない。

ジャーナルのエディターとして

私が昔エディターをやっていたジャーナルの場合は、だいたい送られてきたペーパーの75%ぐらいを落としていました。50%はレビューワーまで行かずに、エディターである私が落としていました。エディターにとって落とすかどうかの判断は、ある程度やっているとコツがつかめて簡単です。一番大事なのは結局はScopeなんです。Scopeがそのジャーナルに合っていないければ、残念ながらそこで終わりです。

Engineeringの場合はApplicationがあるか、Validationをちゃんとやっているか、についてもチャプターを見ればすぐにわかるので、5分で判断がつく。それから長さも重要で、アーカイバルジャーナルである以上、あまりに短いものはご遠慮願いたいわけです。論文を投稿する側の皆さんに言いたいのは、こ

この段階、エディターが見る段階で落とされてはいけない、ということです。ここを通れば、あとはレビューワーとの戦いなので、雑誌によって違うけれども、結構、通ります。最初のエディターのところを通らないと話になりません。

エディターとしては、こうやって長い時間をかけてそのジャーナルのインパクト・ファクターが上がってきます。そうすると、最初のころに落ちた人達は来ないんですが、別のところから新しい人達が投稿してくるようになります。なので、いつまでたっても、リジェクト率が75%という数字は不動で変わらないです。

ジャーナルの最近のいろいろな傾向についてもお話ししたいと思います。最近Web of Scienceが非常に力を持ちすぎて、新しいジャーナルをスタートできなくなっています。どういうことかという、インパクト・ファクターが付いてない新しいジャーナルには誰も投稿しなくなっている、新しいジャーナルを立ち上げられない、つまり新しい分野をスタートできない、ということです。先ほど申し上げたようにカンファレンスはマージナライズされてしまって誰も来ようとしません。その結果、カンファレンスそのものも、何でもいから出してくれ、となると、結局、大学院生の学芸会みたいになってしまう。

それから、Plagiarism Detection(盗用の検出)というのは非常に精緻化していて、iThenticateやCrossRefというのがありますが、これでチェックすると、ほとんどのペーパーは参考文献のせいでsimilarity factorは絶対にはゼロにはならない。レファレンスはみんな共通ですから。昔は、カンファレンス・ペーパーを書いて、それをアップ・グレードしてジャーナルに出す、というのが常識だったのですが、今、これが相当付け加えるか書き直さないかダメになりつつあります。分野やジャーナルによっては、明確にダメと言っているところもあります。これは非常に困るわけです。

また、インパクト・ファクターをあげようとして、セルフ・サイテーション、特にジャーナル・サイテーションと言われるものですが、雑誌によっては「うちの雑誌の論文を引用しろ」ということをレビューのコメントの最後にちらっと書いてきます。これをやりすぎて、Web of Scienceから落とされたジャーナルもあるぐらいですので、これも頭の痛い話です。

そして、オープン・アクセスというのがほとんどのファンディング・エージェンシーから求められています。オープン・アクセスは、結局、著者がお金を払わないといけない。

**「第12回在英日本人研究者会議
英国サバイバルセミナー」講演録**

昇進、テニユア、採用のレファレンス・レター

こういうレファレンス・レターは、人によっては、ライフ・チェンジングなものですから、あまり下手なことは書かない方がいいと思います。私が知っている例で、ネガティブなことを書いて「ごまあ見ろ」とやったら、次に自分に戻ってきた人もいますから。レファレンス・レターを書けないのだったら、書くとは言わない方がいいです。国によっては情報公開請求もありますから、万が一、不利益な決定をこうむった人が、大学に情報公開請求をすると、このレビューを書いた人はこの人ですよ、と裁判所から来てしまうことがある。ですから、不利益なことを書くときは、よほど覚悟して書かないといけません。

良いレビューとは

最後に、良いレビューとはどんなものか。主にジャーナルのレビューですが、まず手短かに書きましょう。20ページの論文に20ページのレビューを書くような、ひまな大学院生も時々いますが、これはレビューの意味がありません。レビューワーは著者でもなく、エディターでもありません。レビューワーは、著者に代わって書いてあげるのが仕事ではありません。日本語で言えば「てにをは」、英語で言えばタイポや文法ミスにやたらとうるさい人がいますが、論文タイトルのミス以外はそのままでいいと思います。タイトルは、著者本人が気づかないことが多いので、タイトルのミスは言ってあげた方がいいです。

エディターにとって有意義なレビューと、著者にとって有意義なレビューは違います。そこを勘案してレビューを書くのが良いでしょう。大事なことは、期限前に、正直かつ手短かに、公正に、レビューのコメントを書くことです。あまりに抽象的なコメントは著者にとっては意味がなく、何をすればいいのか、何がいいのか、何が悪いのか、を指摘してあげるのが大事です。それから、ポジティブなフィードバックも含めましょう。悪い点ばかり指摘すると、著者もめげてしまいますから、「ここはいいけれど、ここを強化しなさい」というような書き方をすると良いと思います。

というところで、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

講演③:「研究の厳しさと喜び」

永瀬秀明, Professor Emeritus, Hideaki Nagase,

Kennedy Institute of Rheumatology, University of Oxford



はじめに

JSPSから講演の依頼を受けたとき、今日のこの会にはいろいろな分野の方がおられるので、何を話そうかと困りました。ただ、共通点は皆さんが研究をしておられる、ということだと思います。研究というのは、厳しいところはたくさんあります。そして、うれしいことや喜びというのも、たくさんあります。今日は、そういったことをお話したいと思います。

内容ですが、まず、「研究は未開領域への探検」。ここから生まれる予想外の発見は研究の最大の喜びだということ。次に、「創造性を養うには」。創造性というのは研究をする上で一番大切だと思うんです。だけれども、この創造性というのはよくわからないものでもあります。研究の分野やその過程によって、創造性というのはすごく違います。創造性はいろいろなところから自分に入ってくるわけですが、他の分野の研究者との交流から学ぶ喜び、そんなことについても少し触れたいと思います。そして、「国際会議と共同研究から豊かさを」。海外との研究交流ですね。最後に、「これからの研究は？」というテーマで話したいと思います。

研究は未開領域への探検

誰も研究を始めるときは、学生として研究室に入って、まず手ほどきを先生から受けるわけです。私も何もわからないうちに研究を始めて、先生から言われたものをやっていたわけですね。それから研究室にいる先輩たちからも学ぶ。こうやって習うことは非常に大切なのですが、未開領域への探検ということを考えると、自分で探求していくことが力になるわ

「第12回在英日本人研究者会議
英国サバイバルセミナー」講演録

けです。自分で新しい領域に入っていくには、自分で「ものを見る力」をつけないといけない。それから、未開領域に行くには、やはり好奇心が最初にあるわけですね。質問、疑問があるわけです。私は、その疑問は複雑なものではなくて、シンプルなものを見る、というのが大切だと思います。例えば、我々はどのようにして記憶ができるんだろうか、というのは、単純な問題に見えるけれども、難しい問題だと思います。それから、問題を解いていくアプローチ。これもシンプルな程よいですね。少なくとも、その部分の答えは出てくる。それを繰り返すことによって、だんだん複雑なものが解けてくるのではないかと思います。

もうひとつ重要なのは、隠された力を養うこと。これは、日々の努力をたゆまずやっていないといけない、ということですね。急に何かを一生懸命勉強しても、そこで終わってしまえば、それにしかなりません。研究というのは、自分が生涯つきあう相手だと考えるとよいと思います。それを自分のものにしていくには、やはり絶えず毎日努力しないとイケない。これはスポーツ選手のトレーニングとも似ていると思います。例えば、4年に1度開かれるオリンピックでは、世界記録がよく更新されます。選手は、絶えず、毎日、訓練を重ねた上ではじめて、4年に1度のオリンピックの舞台に出て、全ての精神を統一して、最高の成果を上げられるからだだと思います。その選手が練習をサボり始めると、オリンピックの当日にはそこまでの記録は出ないんだと思います。

次に、「予想外の発見は最大の喜び」ということに触れたいと思います。予想外の発見というのは、なかなか出会うことがないのですが、データをよく見ると、ロジカルに合わない結果とか、何回やってもおかしい、という場合は(データを得るやり方がまちがっていたらしょうがないですが)非常に面白い。私は、学生さんや若いポスドクの人達がそういうデータを持ってくると、一緒になってよく考えるようにしています。そういうデータは独自性があり、大きな発見にもつながるかもしれないからです。

次に、発見の源はどこにでもある、ということをお話します。私も自分が学生やポスドクの頃は、データが出て読むレベルが貧しかった。でも、先生のところに持って行くと、もっと深く読んでくれる。自分ではよくわからない、面白くないデータでも、先生は「いやあ、これは面白いねえ」と言う。最近わかってき

たのですが、発見する要素というのは、私達の周りに山ほどあるということです。ただ、私達が気づかないだけなんですね。何かの折に、はっと気づくと、そこから開けていくんですね。

例えば、この写真は先週の土曜日にオクスフォード・ストリートに行って撮ってきたものですが、ショッピングを楽しむ人達が大勢いて、歩いても自分達の見える範囲で楽しんでるわけですが、見慣れた街もちょっと見る角度を変えると、とても美しい建物、その装飾が見えてきます。下を歩いている大勢の人達は気づいていないけれど、ちょっと目を上げるだけで、新しいものが見えてくるんですね。そういう「ちょっと見方を変える」ということを、経験を重ねた先生方は心得てるんじゃないでしょうか。

“every block of stone has a statue inside it and it is the task of the sculptor to discover it.” これはミケランジェロの言葉ですが、とても面白いと思うんです。石の中に既に美しいものはあって、それを見つけているだけなんだ、というのですね。“I saw the angel in the marble and carved until I set him free.” これは、さすが偉大な彫刻家の言葉だと思います。隠れた中に美を見ているのですね。そして、その美を自由に上げてあげるという情熱と愛を感じます。

創造性を養うには

先ほども言いましたように、創造性というのは、研究課題それぞれについて違った創造性が必要になると思います。自分で「これが創造的だ」と思ってやってみても、それがうまくいかなかったら、それは創造的ではなかった、ということになります。

まず、我々は自分達の好奇心から発した問題、課題を持っています。そこから、実験をしたり、資料を集めたりして、ある種の結果が出ます。その結果を解釈、考察して、次の計画を立てるわけです。そして、その新しい計画から新しい結果が出る。これを繰り返している間に、仮説が形作られてきます。私は、結果は結果であって、それをどう解釈、考察するのか、ということが創造性につながるのだと思います。創造性というのは考え方にあるんだと思います。

その創造性はどこから来るのか。それは自分の内在から来ることもあります。外からの刺激ももちろん重要です。学会に行ったり、論文を読んだり、国内外の研究者との交流で刺激を受けたりして、「ああ、そうか！じゃあ、これをやってみよ

「第12回在英日本人研究者会議 英国サバイバルセミナー」講演録

う！」となるわけです。私も、自分の研究では、他の分野の研究者から学ぶ、ということが多くありました。彼らは、自分達がやっていることとは違うことを見ている。自然科学の場合、自然のものを見てその仕組みを解析していくわけですが、分野が違くと見る角度が違うんですね。それが一緒になったときに素晴らしいものができてくると思います。ですから、学会なども、私も何度か経験がありますが、自分の分野以外の学会に行く機会があったら、ぜひ行ってみると面白いですよ。あとは、大学の中で開かれているセミナーですね。自分のやっていることだけでなくなるべく幅広く聞きに行く。例えば、自然科学系の人も文系のお話を聞く。参考になることがたくさんあると思います。またその逆も同じではないかと思えます。

それから、研究以外にも、芸術とかスポーツ、旅行に行く、といったことも大事だと思います。イギリスの人達は散歩、森の中を歩くのが好きですよ。あれは非常に大事な時間なんだと思います。健康にもいいですし、頭の整理にも、とてもいいですね。創造的考え方というのは、いつ起こるか分からないんですね。だから、何かいいアイデアが思いついたら書いておく。書いておいて次の日に見たら「なんだ、つまらない」と思うこともあるんですけどね。まとめますと、創造性はいろんなところからでてくる、そして独自のものを生み出す力となってくれるのだと思うのです。

国際会議と共同研究から豊かさを

ここでは、いろいろな人と出会う喜び、そして、外のものから学び、また、向こうもこちらから学んでくれる嬉しさについてお話しします。

日本は面白い国だと思うんですね。歴史上でも遣隋使、遣唐使の時代から、外からいろんな文化や学問を学び取り入れてきたわけです。徳川時代になって鎖国になりましたが、明治維新になってまた外国から学び始める。その頃は西洋に比べ日本の文明はひどく遅れていたから、ヨーロッパのものを精力的に取り入れた。第二次大戦後もだいたい1970年代ぐらいまでは外国へ留学をしても、そこに長く住むのではなくて、日本に戻ってきて、いわゆる箔がつく、というように外から日本に戻ってくるという一方通行の文化や技術の移入だったと思います。最近では、皆さんのように「外国に出て何かやってみよう」という、そういう人が(統計的には少ないらしいですが)私は増えてると感じています。

私が43年前にアメリカに渡ったときは、アメリカの大学で学ぶ日本人大学院生は非常に少なかった。今は、今日のこの会の参加者も20%ぐらいの方は大学院生で、イギリスの大学で頑張っておられる。これは非常に嬉しいことだと思っています。もうひとつは、外国で成果を挙げている日本人がすごく増えている。ノーベル賞も外国で研究している日本人が4人受賞していますね。今までは一方通行だったのが、外に出て活躍する。真の国際交流が始まってきているわけですね。これから益々国際的な共同研究が進みこれからの研究を豊かにしてくれると思います。大いに期待したいものです。

これからの研究は？

私が研究を始めたころ、生化学の分野ではいろいろな試薬を作ることが大切だったんですね。自分たちでタンパク質や酵素を精製したり、抗体を作ったりして、それがそのラボ独自の reagents (試薬) となってユニークな研究をやっていた。ところが、今は、それがだんだん無くなってきて、キットで何でもできるようにになっています。原理がわからなくても、ちょこちょこつとやると、できてしまう。では、これからどうやってサイエンスを進めていくか、という問題になる。やっぱりそこで、創造性と考え方が大事だと思うんです。みんなが似たようなラボになってしまっているから、いかに創造的になるか、ということが大事です。それには、自分達の分野だけではなくて外のものから学んで、他の分野の人たちと共同研究をはじめると良いと思います。先週のNatureに面白い記事が載っていて、インペリアル・カレッジの外科のグループでは、刺繍をする技師や、パペットを操る人から、針で縫合する技術や、手術のときの微妙な手の使い方を学ぶ、というプログラムを作ったそうです。芸術や特殊な技術をもったいろいろな人たちがサイエンスに入ってきている、ということですね。

サイエンスはものすごい速度で進歩しています。この先、どんな速さで進歩するのか。これから100年後、200年後、どんなサイエンスが展開しているのか。私達には想像すらできません。でも、私達が毎日やっていることはみな大切です。これなくして進歩はありません。

昨年末に大分県の国東半島を山歩きしまして、富貴寺というお寺の隣に宿を取りましたら、禅のお坊さんがこんなことを書いていましたので、これを紹介して終わりにしたいと思います。

「第12回在英日本人研究者会議
英国サバイバルセミナー」講演録

「今日こそ出発点

人生とは毎日が訓練である

わたくし自身の訓練の場である

失敗もできる訓練の場である」

この、失敗ができる、というのがいいですね。

「生きているを喜ぶ訓練の場である

今この幸せを喜ぶこともなく

いつどこで幸せになれるか

この喜びをもとに全力で進めよう

わたくし自身の将来は

今この瞬間ここにある

今ここで頑張らずにいつ頑張る」

これは京都の大仙院の尾関宗園というお坊さんの言葉です。

私たちの研究生活の励みになるかと思ってご紹介しました。こ

んなところで、私の話は終わりです。ありがとうございました。



セミナーの終わりに全員で集合写真

在英日本人研究者ネットワーク(JBUK)とは？

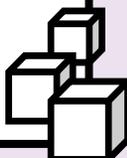
在英日本人研究者ネットワーク(Japanese Researchers based in the UK. 通称JBUK)とは、JSPSロンドンを中心とする在英の日本人研究者による緩やかなネットワークです。イギリスの大学に留学中の大学院学生からポスドク、イギリスの大学にポストを持つLecturerやProfessor、イギリスでサバティカル中の日本の大学の研究者まで、さまざまな分野の約500名が参加しています(2017年5月現在)。

JSPSロンドンでは、JBUKメンバーが日英研究交流を担う重要な人材であるという認識のもと、JBUKと連携した活動を行って

います。在英日本人研究者会議もそのひとつ。毎年フォーマットを少しずつ変えながら、12回を数えるまでになりました。

また、JBUKに登録すると、JSPSロンドンからのイベント、公募情報等をメールで受け取ることができます。JBUKへの登録はこちらから。

<https://ssl.jps.org/members/?page=regist>



英国サバイバルセミナーのプログラムと講演録は以下からもご覧いただけます。

<http://www.jps.org/institute/network.html>

センター長の英国日記④ 「日本の大学の研究インフラ-II」

ロンドン研究連絡センター長
上野 信雄



日本の大学の研究のインフラを中心とする現状についての第二回である。前回、日本の国立大学の運営費交付金の大学格差や教職員数の大学による違いを図で示し、歴史的な経緯から生じた大学の区別、旧帝大、旧制大学、旧六大学、新八大学、その他について述べた。そして、今でもかつての大学の区分けが明確に残されており、結果として運営費交付金や教職員数などに反映されていることを示した。どうやら、同じスタートラインから競争しても小規模国立大学の研究者は勝ち目のない構造にされてしまっている様にも思える。つまり、私たちは「皆で一緒にスタートラインに立てる」ことが公平な競争と勘違いしている様である。スーパーマン教員、あるいは魔法を使う教員を集めない限りこのような大学の格差構造を自ら変えることは容易でない……。しかし後で述べるように、旧帝大・旧制大学以外の大学にも強力なスーパーマン教員・研究者が存在しているようである。

日本の大学、日本の研究は大丈夫か?-その2

近年、日本の大学の研究力の低下を危惧する記事が数多く見られるようになってきている。とりわけ日本人がノーベル賞を受賞すると、受賞者による危惧がマスコミで大きく取り上げられる……。そしてすぐに忘れてしまう。色々な大学の色々な年齢の大学人と意見交換をしているが、日本の大学の一般的な教員、研究員の問題意識は意外と少なく、(i) 状況に無関心な方、(ii) 問題を把握していない方や把握するために必要な経験値の足りない方、(iii) 改善に向けて努力することをあきらめてしまっていると思われる方、が意外に多いことに驚いてしまう。

自分たちの状況が、「妥当か、そうでないか」を正しく判断するためには多くの情報を知っている必要があるので、簡単なことではない。分かりやすく説得力のある方法は日本の状況を

他国の状況と比較することである。前回の「センター長の英国日記③」で日本の国立大学の歴史的な生い立ちと国からの支援(運営費交付金と教職員数)についての現在の大学間格差を眺め、先進国の中で国の構造として類似性のある日本と英国の予算上の比較を行った。これによって、日本の状況が少しは見えてきたと思う。

日本の研究力の国際競争力の低下:Nature誌の指摘

日本の研究アクティビティの低下に関して、Nature2017年3月23日号の特別企画冊子「Nature Index 2017 Japan」に、68誌の自然科学系学術ジャーナルの論文著者の所属機関を分析したNature Indexの日本に関する結果が掲載された。「今後10年間でアウトプットを増やせず、質の高い科学を育むことができなければ、世界トップレベルの研究国としての地位を失うリスクがある」という指摘であり、その原因としてフルタイムの研究ポジションが減少したことや研究費の他国に対する相対的減少が指摘された。「日本の科学研究はこの10年間で失速している」というネイチャー・ジャパンのプレスリリース[1]を受けて新聞各紙も本件を報道していたのでご存じの方も多いと思われる。すでに日本の大学でも十分理解されてきた問題であるが、海外から指摘されると、マスコミはまた報道したが新聞記事の論調の温度は事の重大さに比べると低い様に思う。

日本の大学では、教員が事務職員や技術系職員の仕事をやっているなど職務分担の構造上の問題がある。すなわち日本の優れた教員は、英国など欧米の大学の教員に比べると研究時間が確保できないのである。いわゆる新制大学ほどその傾向は強い。そのためNatureの指摘だけが原因ではないが、「センター長の英国日記」でも論じているように研究員の安定雇用も研究費問題であるから研究費は大きな原因のひとつで

もあり指摘は妥当である。現在、日本の財政が危機的な状況であるので、研究員の雇用改善や研究費の増額に関しては容易なことではないが、本気で対策を検討する必要がある。

研究費の大学間格差:主要国間の比較

前回の日本と英国の国立大学予算の大学間格差の比較から、日本の大学間格差が非常に大きく、文部科学省がどうやら大学間格差を維持する政策を現在も取っているように思え暗い気持ちになってしまった。繰り返すが、日本は、1980年代には世界第2位の経済大国になっており、急な成長のための誤解もあり欧米から激しいバッシングを受けた。現在、中国に追い抜かれ第3位になったとは言え、長年にわたって世界のトップ3の地位をキープしている「経済大国」である。

最近、主要先進国、米、独、日、英の「大学間格差」を比較し日本の問題点をまとめた報告が発表されたので紹介する。図1(左図)は、米、独、日、英の競争的研究費の「大学間格差」を比較した結果である[2]。ドイツ、アメリカの大学は日本や英国の大学に比べて競争的資金の格差が非常に小さいことが分かる。米国やドイツでは色々な大学の多くの教員が研究費を得て「活躍」できる可能性が大きいことを示している。当然のことであるが、日本や英国の研究者や大学に比べると、より多くの教員・研究員が世界を駆け巡って国際共同研究を行うことや、多彩な大学が自ら国際研究集会を主催することもより可能であると推測できる。

2000年以降、日本でも21世紀COEを初めとして大型の競争的研究・教育費が準備されるようになり、毎年多くの多様な国際研究集会が行われているが、開催できる大学、グループはどちらかというと限られているように見受けられる。図1(左図)の日本の競争的研究費は学術振興会の科研費について他国のものと比較したものであるが、前号の「センター長の英国日記③」で取り上げた運営費交付金の大学間格差より一層格差が大きいことが分かる。

繰り返すが、図1(左図)から分かるように、米、独、日、英の4ヶ国の中では、独・米において大学間格差が小さく、日・英、とりわけ日本の国立大学の大学間格差が激しいことが一目瞭然である。

先に進もう。図1(右図)は両対数表示したもので、左図(線形表示)に比べると変化が直線に近くなっている。縦軸の値(y)が横軸の値(x)のべき乗に比例するとき、 $y=ax^a$ 、両対数表示をすると直線となる。格差が近似的に「べき乗則」に従うと言われるゆえんである[2]。

このような取り扱いになじみがない読者のための参考として、べき乗の指数(-a)のいくつかの値での曲線(直線)群の違いを図2(次ページ)に示しておく。aの値が大きいと格差が大きいことを示している。図2の左図は図1の左図と類似した減衰曲線であり、aの値が大きいときにより大きい格差を示す急激な減少曲線となる。図2の右図は左図を両対数の座標軸で表したものである。

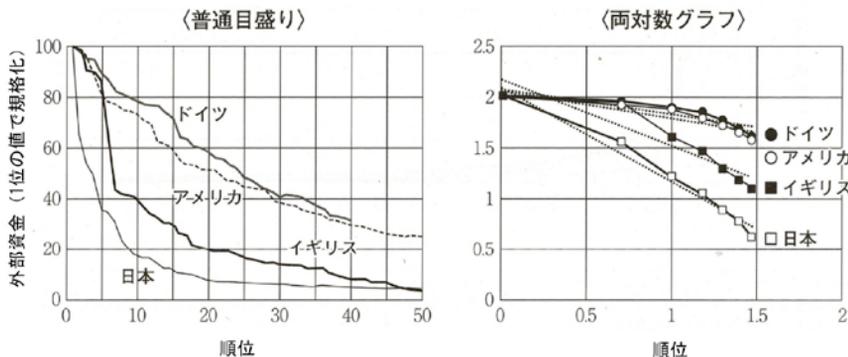


図1 アメリカ、日本、ドイツ、英国の研究費(外部資金)の大学間格差の比較[2]。ドイツ:DFG(2012年)、アメリカ:NSF(2012年)、イギリスHE Finance Plus(2012/13年)、日本:学振・科研費(2013年)。縦軸は1位の大学の獲得研究費を100とした時の相対値。横軸は、各大学のランキング(順位が50位まで示されている)。

aの値が大きいと直線の傾きが大きくなり、大きな格差があることを表している。図1では、左図を両対数表示して右図が得られる。これらの比較から、両対数軸による直線表示からべき乗則の精度と格差の指標としてべき乗指数(-a)が分かる。

表1(次ページ)に大学の教員数、運営費交付金、研究費などの国立大学間の格差と、研究のアウトプットとしての発表論文数の格差、そして日本(科研費)との国際比較のために米、

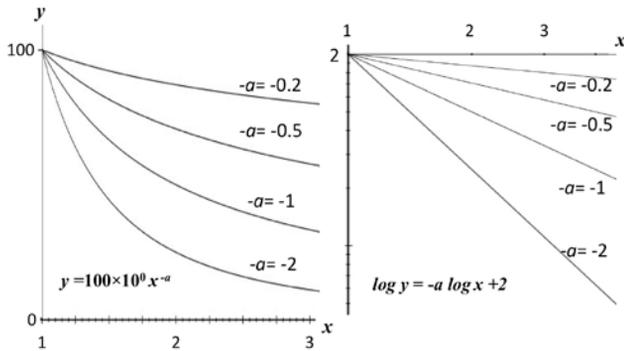


図2 参考。左: べき乗関数の形状(両軸とも線形座標軸)。右: 両対数座標軸では形状は直線になり、急な減少関数ほど直線の傾き(a)が大きい。

独、英の競争的研究費のべき乗則指数の値(-aに対応)が示されている。

ちなみに、運営費交付金は、1-40位、41-80位、81-86位でべき乗指数(絶対値a; 表ではマイナス値で表示)が異なり、0.65, 1.69, 11.34と順位が増えるにつれ急激に格差が増加することを示している。一方、科研費採択件数のトップ50国公立大学の総額についてのべき乗指数は1.0と大きい数値[格差大]である。このうち旧帝大、他の旧制大学、旧六大学などの21国立大学(表1の※1を参照)の各大学の科研費総額については1.0、これを教員数で補正すると、べき乗指数は0.51となって格差が小さくなる。すなわち科研費の少ない大学(すなわち教員数も少ない)の教員は科研費の多い大学の教員に比べて相対的にたいへん頑張っていると言える。科研費に大型の競争的資金であるCREST、COE、厚労省科研費を加えた全競争的資金を見ると、べき乗則指数は「1.20」というより大きな数値になり、格差が更に拡大する。一方、発表論文数の格差を見てみると、21大学から文化系の一橋大学を除いた20国立大学の格差は、指数、0.95、教員一人あたりの論文数にすると0.39と格差が激減し、トップ10%論文では、指数、0.24となりさらに格差が少なくなる。すなわち、研究論文の質・量共に、これら20大学の中の研究費の少ない大学の教員は大変成果を上げていると言え。以上の結果は文献[2]において多角的に考察されている。この文献[2]では、「東大一人勝ち」という研究費に関する大学間格差の問題点の考察をおこない、格差を

改善するための方法が提案されている。これまでに、文献[2]の様に研究費配分の「東大一人勝ち」の問題点をデータを基に指摘し、改善の必要性を真摯な形で議論し、公に提案したものをこれまで見なかったように思われる(注: 三重大学長であった豊田長康氏も同様の努力をされていた様に考えられる)。[参考: <http://blog.goo.ne.jp/toyodang>]

表1 国立大学の大学間格差に関わる指標のべき乗指数値[1]: べき乗則指数値(-a)の絶対値(a)が大きいほど格差が大きい。

項目	項目	対象	年度	べき乗則指数
教員数	教員数	21国立大学	※1 2016	-0.79
		運営費交付金	2015	-0.81
		1~86位(全国立大学)	2016	-0.83
		1~40位	(図2) 2016	-0.65
		41~80位	2016	-1.69
		81~86位	2016	-11.34
研究費	教員あたり運営費交付金	21国立大学	2016	-0.26
	科研費採択件数	採択件数トップ50国公立大	2016	-0.89
	科研費総額(直接+間接)	採択件数トップ50国公立大 (図3)	2015	-1.0
		21国立大学	2015	-1.1
	教員あたり科研費金額	21国立大学	2016	-0.51
		全競争的資金 (図5)	2007	-1.2
論文	論文数	20国立大学	※2 ※3	-0.95
	教員あたり論文数	20国立大学		-0.39
	トップ10%論文%(Q値)	20国立大学		-0.24
国際比較	アメリカ	NSF, NIH, USDA (図5)	2005	-0.34
		NASA, DOE, DOD (図5)	2005	-0.73
		NSF (図4)	2012	-0.27
	イギリス	HE Finance Plus (図4)	2012/13	-0.64
	ドイツ	DFG (図4)	2012	-0.25
	日本	JSPS (図4)	2013	-0.92

注: 表中の図番号は文献[1]中にある図の番号であるから、本記事の図番号ではない。
 ※1 21国立大学: 北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京医科歯科大、東工大、一橋大、東京農工大、千葉大、名古屋大、新潟大、金沢大、奈良先端大、京都市大、大阪大、神戸大、岡山大、広島大、九州大、熊本大、長崎大
 ※2 20国立大学: 上記の21国立大学から一橋大を除いた20大学。
 ※3 論文の年情報は不明。
 参考: 米国の研究費: NSF(科学全体を統括するNSFのもの。主として理工系)、NIH(生命系)、USDA(農学系)。戦略的研究費を配分するNASA(宇宙)、DOE(環境)、DOD(防衛)。

研究効率による大学ランキング

上記で述べた「研究費の少ない大学の研究成果」に関連して、研究効率に関するランキング、すなわち使用した研究費あたりの論文被引用数、論文数などを調べたデータがあったので、少し古い表2に紹介しておく[3]。

このランキングは、京都大学の教員が、研究生産性(学術論文が1回引用されるのに必要な研究費)に基づいた大学の順位を求めたもので、トムソン・ロイター(米国ニューヨーク)が2010年4月に発表した「論文の引用動向による日本の研究機関ランキング」における世界順位が400位以内の日本の大学のみを対象としている。尚、良く知られているように多くの日本の大学の世界ランキングがその後、急激に低下している。

表2の研究効率の順位は、上で述べた表1に示された分析結果とよく対応している。表2のような分析も有用であるので、例えばUniversity Research Administrator (URA)のどなたかが調べてみてはどうだろうか。

最近、沢山の世界大学ランキング[4]が発表されるようになり、色々な意味で話題になっている。大学ランキングは色々な評価項目があり、それぞれの国によって着眼点も異なるのでランキングの公平さについての問題点も指摘されている。入試における偏差値のごとく、ランキングの数値が社会の人々や入学希望者の大学の評価指標になってしまうので、本当にランクを少しでも上げたければ、愚痴るのではなく、自校の情報を再整理・分析して相対的な弱点を具体的に把握して対策を立て実行すべきである。場合によっては、日本でも、上海交通大学のように自国の観点から世界大学ランキングを作成するだけの情報収集・分析力を持つことも必要であろう。また一方で、高いランクの大学に所属する教員は競争的資金の審査を分担する時には多角的に公平な視点を持つこと、また研究のユニーク性・重要性の判断などにおいて「虎の威を借る」のではなく、自ら研究力の向上に努力しその経験を積み重ねた結果を反映してほしい。

尚、次のような点にも留意したい。研究の種類によっては、本質的に莫大な研究費を必要とする分野がある。素粒子、宇

宙、高エネルギー物理学関連の実験分野などの巨大サイエンスに関わる分野はその例である。このように巨大な研究費の必要な分野や、結果が出るまで多くの時間を要する研究(失敗に終わるかもしれない研究を含む)は、人類の可能性の追求とその尊厳のために先進国・経済大国は人類を代表して実施する責務があると思う。日本は、経済大国になって久しい、また国民が自信を持って日本は先進国であると言えるであろう。しかし、先進国・経済大国としての十分な役割を果たしてきたと言えるだろうか。表2の「研究効率」の高い多彩な研究も最後に述べたような人類の尊厳の地平を拡大するような研究も公平に考え、研究費の重点配分の基本方法を根幹的に見直すなどによって、将来の日本のために先進国・経済大国に恥じない創造性のある個性的な大学群の形成を期待したい。大きな格差の存在は発展途上国や社会主義をうたう国家の特徴ではないか。

次回は、研究時間の確保に関係した大学の研究インフラについて考える予定である。

表2 研究費あたりの論文引用数[3]

順位	大学名	世界順位	被引用数[回]	論文数[報]	研究費[億円]	論文単価[万円]	被引用単価[万円]
1	千葉大学	311	148,811	12,659	18.3034	145	12.3
2	金沢大学	396	108,928	9,374	14.5891	156	13.4
3	岡山大学	343	130,575	13,558	18.2988	135	14.0
4	大阪大学	37	628,365	44,707	91.3258	204	14.5
5	筑波大学	231	197,384	17,911	30.2963	169	15.3
6	広島大学	298	155,650	16,356	24.3704	149	15.7
7	東京工業大学	171	255,204	24,825	43.1963	174	16.9
8	九州大学	124	312,666	29,457	54.8825	186	17.6
9	京都大学	31	732,732	52,735	131.8299	250	18.0
10	東京大学	11	1,041,057	71,838	187.5031	261	18.0
11	名古屋大学	110	338,129	28,093	61.7893	220	18.3
12	北海道大学	146	284,189	28,809	56.1070	195	19.7
13	東北大学	65	473,014	42,509	96.8776	228	20.5
14	神戸大学	356	124,372	11,832	25.8906	219	20.8

注： 本表の元データの詳細については資料[3]を参照してほしい。

参考

- [1] <http://www.natureasia.com/ja-jp/info/press-releases/detail/8622>
 [2] 黒木登志夫、「大学格差はべき乗則に従う - J2 COEの提唱 -」、IDE現代の高等教育、No.589大学の研究力、2017年4月号、pp.17-25。尚、黒木登志夫先生は、現在、日本学術振興会・学術システム研究センター顧問。
 [3] <http://blog.chase-dream.com/2010/05/30/990>
 [4] <https://ja.wikipedia.org/wiki/世界大学ランキング>

「高等教育研究法が成立」

JSPS Londonアドバイザー 中塚淳子
(2017年3月まで在任。4月よりJSPS国際企画課長)

Point

2017年4月27日、英国の高等教育研究法の成立により、以下が決定した。

- 高等教育市場への新規参入機関の登録や学位授与権の付与等、高等教育機関の質や基準に関する法的権限を有するとともに、教育に関する助成を行う学生局 (Office for Students) を設置する。
- 研究・イノベーションをより戦略的に進めるため、既存の研究助成機関を統合し、英国リサーチ・イノベーション (UK Research and Innovation) を設置する。

Introduction

4月27日、英国では高等教育研究法⁽¹⁾が成立し、1992年の高等教育改革 (高等職業訓練学校 (Polytechnic) を大学に昇格させたことにより、大学数が急増。) 以来、最大の高等教育改革に向けて動き出すことになった。

今回の改革については、まず、2015年11月の緑書 (“Fulfilling our Potential: Teaching Excellence, Social Mobility and Student Choice”)⁽²⁾において、高等教育における規制構造を簡素化するとともに教育評価制度を導入し、競争性と透明性を高めることにより、学生の利益や選択肢を増やすこと、より効率的・効果的な研究費配分を行うため、既存の分野別の研究会議等を統合し、一つの研究助成機関を設立すること等の案が示された。次いで、パブリックコメント (consultation) 等による意見を踏まえ、2016年5月の白書 (“Success as a Knowledge Economy: Teaching Excellence, Social Mobility and Student Choice”)⁽³⁾において、改めて改革の柱が示されるとともに、同月、議会で最初の審議が行われた。英国のEU離脱決定後はMay政権発足により、大学の監督官庁がビジネス・イノベーション・技能省 (BIS: Department of Business, Innovation and Skills) から教育省 (DfE: Department for Education) に移り、一方で、研究費については、BISを前身とするビジネス・エネルギー・産業戦略省 (BEIS: Department for Business, Energy and Industrial Strategy) が引き続き所管することになった。そのような状況の下、Jo Johnson大臣は、DfEとBEIS両省の閣外大臣として大学・研究担当大臣を務め、自身の打ち出した高等教育改革を先導してきた。そして、下院・上院での度重なる審議と法案の修正を経て、ついに高

等教育研究法が成立した。

同法の下、教育、研究それぞれに、学生局 (OfS: Office for Students)、英国リサーチ・イノベーション (UKRI: UK Research and Innovation) という強大な権限を有する機関が新設されることになるが、本号では、これにより、英国の高等教育をめぐる状況がどのように変わるのかを概説する。

1. 高等教育の構造・規制改革—学生局の新設⁽⁴⁾

(1) 背景

英国における高等教育のファンディングシステムはここ数年で大きく変化してきた。イングランド高等教育財政会議 (HEFCE: Higher Education Funding Council for England) は1992年の継続・高等教育法により設置されたイングランドの高等教育機関への規制等法的権限を有する主要な公的機関であり、設置当時はHEFCEから各大学に直接配分する補助金 (日本の国立大学の運営費交付金に相当) が、各大学の収入の大半を占めていた。しかし、2010年に学生の年間授業料を1,310ポンドから6,000ポンド (2017年度の上限は年間9,250ポンド) に上げる改正がなされ、それ以来、大学の授業料収入が増えるのに対し、直接補助金の額は大きく減少しており、2014-15年度には、HEFCEが助成する130機関のうち90機関において、その収入全体に占めるHEFCEからの補助金の割合は15%以下となっている。また、高等教育機関も多様化し、適用される法体系が異なることから、HEFCEが助成しない機関もあるなど、HEFCEの本来の役割を果たしにくくなっており、高等教育機関すべてに適用される一つの法体系を整備する必要性も指摘されていた。そして、白

書において、HEFCEの機能を二分し、高等教育分野の監督機能はOfSに、補助金配分機能は後述するUKRIに持たせるという案が示された。

さらに、高等教育を受ける学生の利益は、質の高い教育を受けること、知識や技術を身に付けて卒業し、就職できることなどであるため、教育評価(TEF: Teaching Excellence Framework)の実施により教育の質の向上を目指すとともに、不要な中退を減らすため、入学前から必要な情報を提供することも改正に盛り込むこととなった。

(2) 改正内容

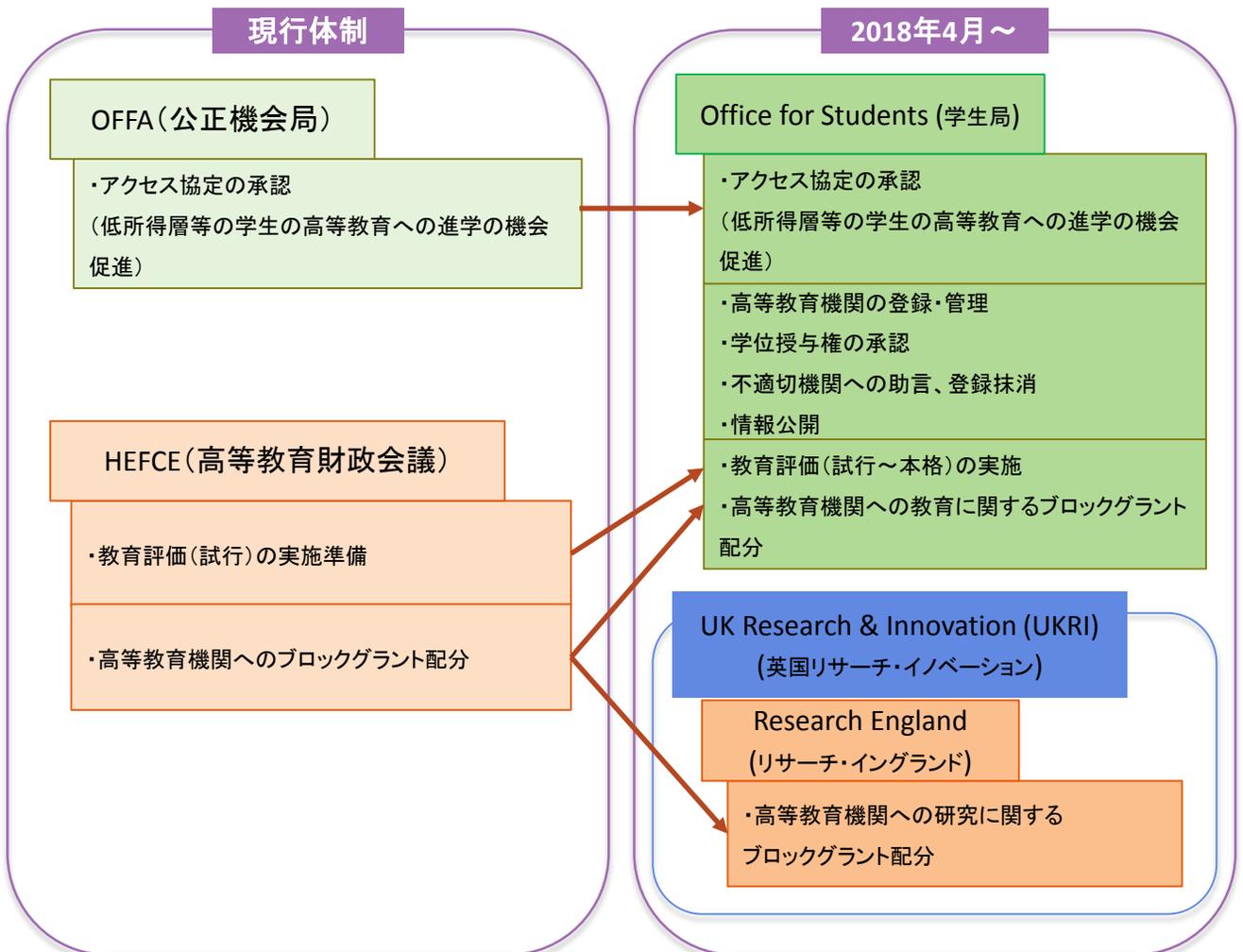
学生の利益増進を目的とした今回の改革の1本目の柱は、以下の権限・機能を有するOfSの新設である。具体的には、学

生の選択肢を増やすため、新たな機関の高等教育分野への参入を認めて競争性を高めるとともに、学生が選択する際の判断に必要な情報の公開を義務付けるなど透明性を高めることである。また、TEFの実施により教育の質の向上を図るとともに、必要な要件を満たしていない機関に対する規制を行うことで学生の利益を保護する、などの内容が含まれる。

①高等教育への進学機会促進

イングランドでは、低所得層や民族的マイノリティなどの学生が経済的理由により大学進学を機会を失わないよう、法定授業料を超える授業料を設定する大学は、そのような学生の支援等について定めたアクセス協定 (Access Agreement) を締結し、あらかじめ、公正機会局長(DFA: Director of Fair

英国の高等教育関係機関の再編



Access)の承認を得なければならない。そのための事務局が、独立規制機関の公正機会局(OFFA: Office for Fair Access)である。一方、HEFCEもその支援のための関連経費を配分していることから、両機関の有する高等教育へのアクセスの機会を守る機能をOfSに移管することとなった。(それに伴い、両機関は廃止される。)

②高等教育機関の登録、学位授与権の承認、情報公開

競争性を高め、選択肢を増やすため、高等教育分野への新規参入を認め、機関の登録、承認をするとともに、学位授与権の付与について承認を行う。ただし、学位授与権を付与するにあたっては、OfSはあらかじめ、大学質保証機関(QAA: Quality Assurance Agency)のような第三者機関に相談し助言を受けなければならない。

また、低所得層の学生等の高等教育への進学機会の状況、財政基盤等の状況など、教育の質の保証や学生の選択に役立つ基本的な情報を収集し、少なくとも年に1度は適切な方法で公開する。なお、OfSは登録機関から登録料、その他のサービスのための費用を徴収することができる。

③リスクベースに基づく規制

OfSにおいて、全ての高等教育機関に共通のリスクベースによる規制を行うこととし、高等教育機関として法的要件を満たしていない場合には、注意・助言をして改善を促す。改善が見られない場合には、罰金を課したり登録を抹消したりすることができる。

④質の評価の実施

OfSは高等教育機関の質の評価を行うとともに、現在試行中のTEF⁽⁵⁾の本格実施に向けた検討を行う。

なお、TEFの結果を授業料の値上げ率に反映することについては、評価基準の適切性についての疑義も残る中で反対意見が多く、その導入時期は2020年からとされた。

⑤教育に係るブロックグラントの配分

現行ではHEFCEが配分している高等教育機関へのブロックグラントのうち、教育の提供、教育上必要な施設やその他の活動経費等のための補助金、奨学金等を各機関に配分する。

2. 研究助成機関の構造改革—研究助成機関の統合によるUKRIの設置⁶⁾

(1) 背景

2014年4月の“研究会議に関する3年次評価(Triennial Review of the Research Councils)”⁽⁷⁾において、研究会議間の支援の重複の可能性や研究会議を横断する手続きの必要性が指摘された。それを受け、英国研究会議(RCUK: Research Councils UK)を通じて分野融合の取組を進める一方で、政府は、Paul Nurse卿に対し、研究会議の改革のあり方について検討を求めた。Nurse卿はその報告書“英国研究会議に関する評価(A Review of the UK Research Councils)”⁽⁸⁾(以下、「ナースレビュー」という。)"において、英国の研究・イノベーションシステムは世界をリードするものであると認めた上で、より効果的なシステムにするために、7分野間及び研究と政策立案の間の政策的なつながりのギャップ、分野別に研究投資することによる、多分野融合、分野間融合の研究を推進する能力の欠如、スムーズにイノベーションに結び付ける方策など商業化推進力の弱さ、を埋めなければならない、と指摘。そのためには、(法的位置づけを有しない)RCUKを公式に1つの非省庁型公的機関(NDPB: non-departmental public body)とし、各研究会議の枠を超えた政策を打ち出せるようにすべき、などの具体的な勧告を出していた。

(2) 改正内容

改革のもう一本の柱は、英国の主要な研究助成機関を統合した英国リサーチ・イノベーション(UKRI: UK Research and Innovation)の設置である。UKRIは9つの研究・イノベーションに関する助成機関から構成され、年間の予算は60億ポンドにのぼる。UKRIを構成する機関は、分野ごとの7つの研究会議、ビジネス先導型のイノベーションを支援するイノベートUK(Innovate UK)、HEFCEの大学へのブロックグラント配分機能のうち研究に係る配分を担う、新設のリサーチ・イングランド(Research England)である。

一方で、UKRIの下にあっても、各研究会議とイノベートUKの名称、審査等における各機関の自治は維持される。また、9機関それぞれの予算は、大臣からの毎年のグラントレターにより決定されるが、その際、大臣はUKRI理事会から、UKRIの戦略に照らしての優先度や分野間のバランス等について助言を受けることになっている。つまり、各機関の従前からの特徴・強み

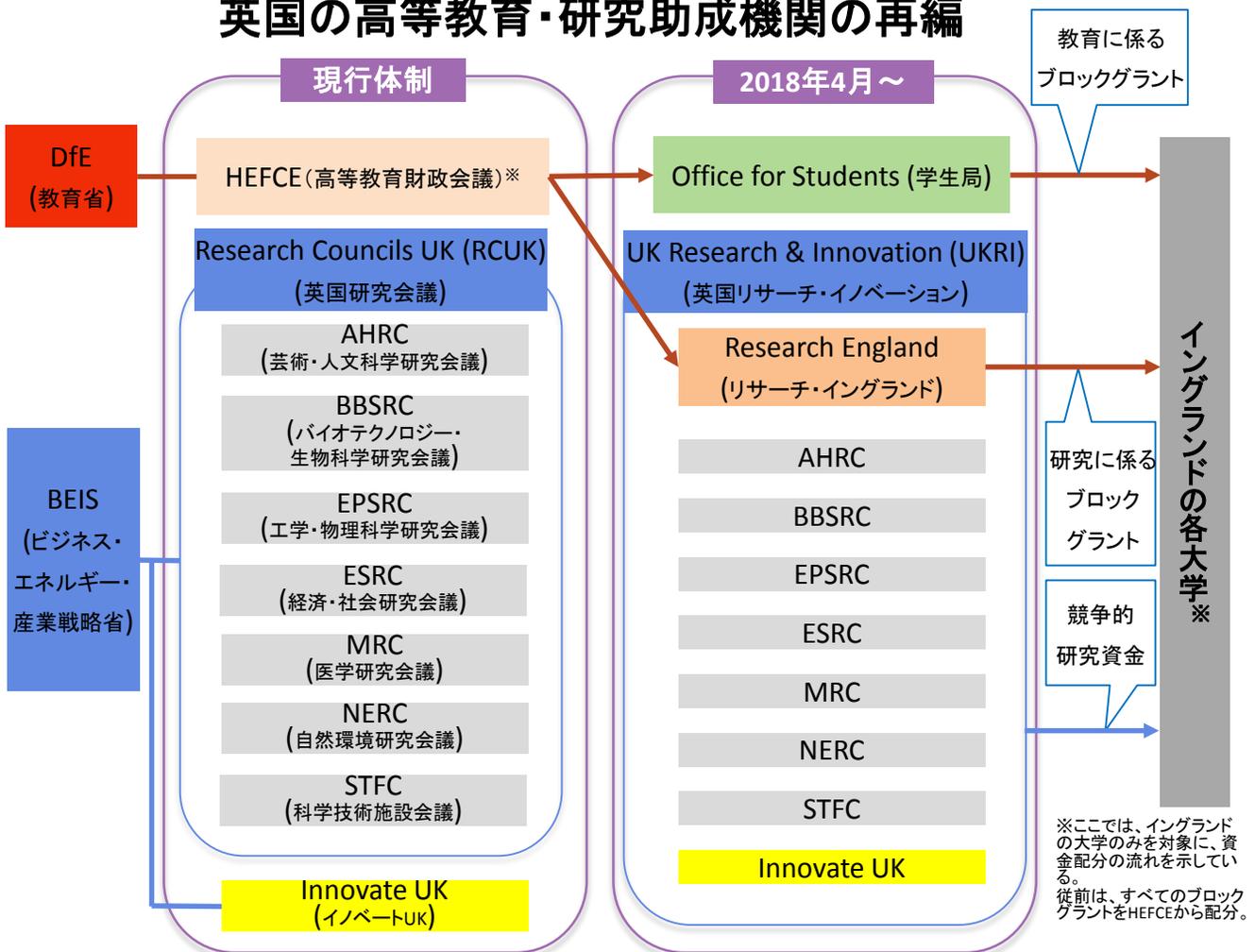
は活かしつつ、UKRIがその戦略に基づき全体のバランスを見
ること、より効率的・効果的な研究・イノベーションの推進を
目指すものである。

なお、各研究会議が配分するのは、競争的補助金
(Competitive grant funding)であり、特定の人々、プロジェクト
やプログラムの、いわば将来の可能性に助成するものである。
他方、従来、HEFCEが配分してきたのは、質に基づく研究助成
金(QR: Quality-Related research funding)であり、研究評価
(REF: Research Excellence Framework)により、過去のパフォー
マンスに基づいて各高等教育機関に直接配分するもので、そ
の用途は大学がかなり自由に決めることができた。この大きな
2つの研究資金の流れによる研究助成システムが“デュアル・
サポートシステム”であるが、今回の改正により、UKRIという一
つの機関の中でデュアル・サポートを行うことになる。そして、

研究費の配分決定は“ホールデンの原則(当該分野の専門家
により、個々の研究の質やインパクトの評価に基づき決定する
こと)”によることと、この7つの研究会議とリサーチ・イングラン
ドとの間でバランスの取れた配分をすることの必要性が、初め
て法律に明記された。

UKRIという傘の下で、各機関がそれぞれの分野においては
引き続きリーダーシップを取りつつ、従来の縦割りの研究推進
では支援が難しかった、多分野融合や分野間融合の研究、基
礎研究から商業化やイノベーションにつながる研究等を戦略的
に推進するとともに、英国の研究イノベーション政策に関する
発言力を強めること、専門家やベストプラクティスの共有により、
大型プロジェクトの管理や政策決定を効果的に実施することな
どが期待されている。

英国の高等教育・研究助成機関の再編



結びに

OFSの設置については、高等教育機関の設置認可・取消から教育評価、機関評価まで、幅広いだけでなく非常に重い権限を有しており、それを一つの機関が担うことについて異を唱える意見も多かったが、最終的には設置が認められた。OFSの業務の大部分は、従前もOFFAやHEFCEが実施していたことではあるが、OFSが核となることで、必要な情報の集約、共有がよりスムーズに行えるのであれば、学生にとっても各機関にとってもメリットになりうるであろう。一方で、教育の質を上げることで授業料を増額できる仕組みを構築するとともに、機関から登録料を徴収してOFSの運営費に充てるなど、財政が厳しい中、国からの支援経費を増やすことなく、各機関が取り組まざるを得ない仕組みを作り、全体として改善に導くという発想はすごとく感じる。

研究助成についても、UKRIという強大な機関ができることになる。当面は従前ベースで各機関への予算配分がなされつつ

も、UKRIとして全体のバランスを見ることにより、配分額を調整したり、従来は難しかった分野間融合、多分野融合等のプロジェクトを支援したりするうちに、少しずつ真に一つの機関として機能し始めるようになるものと思われる。

加えて、OFSとUKRIの間でも情報共有や業務の連携実施などが求められている。あらゆるデータをリンクさせて全体を見ることは、戦略を立てる上では重要であるが、特定の分野、大学等に重複して助成することを避けられる反面、本当に集中的に推進したいときにはそれもできることになる。また、バランスのよいデュアル・サポートが求められているが、その「バランス」を取る対象に、イノベートUKは含まれていない。産業戦略において、イノベーションや経済効果につながる研究を促進する中で、純粋な基礎学術研究のための予算をどのようにキープしていくのか、Brexitを控え、どのような科学技術戦略を打ち出してくるのか、引き続き注視していきたい。

(1) Higher Education and Research Bill

http://www.legislation.gov.uk/ukpga/2017/29/pdfs/ukpga_20170029_en.pdf

(2) Green Paper

<http://www.universitiesuk.ac.uk/our-work-in-parliament/Documents/green-paper-research-funding.pdf>

(3) “White Paper: Success as a Knowledge Economy: Teaching Excellence, Social Mobility & Student Choice”

https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/523546/bis-16-265-success-as-a-knowledge-economy-web.pdf

(4) OFS設置構想 (Policy paper, June 2016)

https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/527757/bis-16-292-ofs-case-for-creation.pdf

(5) TEFの概略については、Newsletter No.50を参照されたい。

(6) UKRI設置構想 (Policy paper, June 2016)

https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/527803/bis-16-291-ukri-case-for-creation.pdf
<https://www.gov.uk/government/publications/higher-education-and-research-bill-uk-research-and-innovation>

(7) 研究会議の3年次評価

https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/303327/bis-14-746-triennial-review-of-the-research-councils.pdf

(8) “Nurse review”

https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/478125/BIS-15-625-ensuring-a-successful-UK-research-endeavour.pdf

(9) OFSとUKRIの協力について

https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/568909/UKRI_OFS_joint_working_factsheet.pdf

第11回 ロンドン大学

ゴールドスミスカレッジ音楽学部 松本直美



大阪大学にて講義中の筆者

今回は、Historical Musicologistとして多方面に活躍されているロンドン大学ゴールドスミスカレッジの松本直美先生に、「音楽学」をイギリスで学ぶこと、その面白さや大変さについてご紹介いただきました。また、人文学の新たなエンターテインメントとしての可能性を追求しながらイギリスと日本を繋ぐ架け橋となる夢も語っていただきました。

私が最初ロンドンに到着したのは1996年7月。その9月に音大の大学院声楽科に入学することになっていました。当時は一年間の課程が終わり次第、日本に戻るつもりでいたのに進学して就職し、気がついたら英国滞在が20年を超えていました。思い返すに感慨深いものがあります。

私は現在Historical Musicologistとして研究、指導に携わっていますが、日本にいた頃は芸術大学を卒業した声楽家として活動しており、学問の世界には全く無縁でした。演奏活動をするうちに17世紀のイギリス、イタリア音楽に関心を持つようになり、そういった音楽の演奏方法を勉強するためにイギリスにやって来たのです。最近では日本でも「古楽」(古い時代の音楽をその時代に合った楽器、方法論で演奏する)が盛んになりましたが、当時はまだまだ日本で勉強できることには限りがありました。ロンドンの音大の大学院で声楽実技を学んだ後、古楽に不可欠な史料研究に興味を持ち始め、一般大学の修士課程音楽学専攻に入学し直して、初めて論文の真似事を書いたのが1999年のことでした。

日本での「音楽学」は、芸術大学、音楽大学を除いた一般大学においては文学部に一講座あるかどうかというややマイナーな存在ですが、ヨーロッパの音楽学には長い伝統があり、イギリスではほとんど全ての大学に音楽学部があります。イギリス

Dr Naomi Matsumoto

Lecturer in Music, the Music Department, Goldsmiths, University of London

- 1997年 Postgraduate Certificate in Vocal Performance, Trinity College of Music, London
- 1997年 Licentiate Diploma in Vocal Performance, Trinity College of Music, London
- 2000年 MMus in Historical Musicology, Goldsmiths College, University of London
- 2005年 PhD, University of London
- 2005年-2012年 Visiting Lecturer, the Music Department, Goldsmiths, University of London
- 2012年-2015年 Associate Lecturer, the Music Department, Goldsmiths, University of London
- 2015年- 現職。専門は17、19世紀イタリアオペラ、特に「狂乱の場」の解釈研究。
- 2003年 The British Federation of Women Graduates National Award受賞
- 2008年 Gladys Kriebel and Delmas Foundation British and Commonwealth Independent Research Award受賞
- 2013年 JSPS Symposium Scheme for Japanese Researchers based in the UK採択

の大学の音楽学部のカリキュラムは音大のそれとは一線を画すもので、演奏、作曲と言った実技の訓練も含みはしますが、学問としての音楽研究に中心を置きます。その中で、音楽学にとってのシスター・ディシプリン(哲学、文学研究、歴史全般など)にも触れられるようになっています。修士の頃、ひーひー言いながらアドルノを読んでいたら、社会学を専攻していた友人に「音楽学生でもアドルノを読むの！」と驚かれたことがありますが、アドルノ(彼自身が作曲家でもあった)は勿論、ラカンもデリダもフーコーも音楽学専攻生の課題図書に入っています。

私は音楽学を最初から英語で始めたため、「日本語でのそれまでの蓄積を翻訳しなければいけない」という過程を殆ど経ずに来られたのですが、それでも常に自分の第二言語で研究、出版活動をするということは容易なことではありません。大変教育熱心な指導教官に恵まれたこともあって、修士、博士課程時代は比較的困難無く乗り越えられたように思うのですが、学位を取得後、なかなか英文で査読付き論文が出版できず、ポストに

応募しても最終審査まで残りながら結局獲得できないことが続いた時代は辛かったです。結局、少しずつながら業績を上げて、学生の頃から非常勤講師として教鞭を取る機会を与えてくれた母校に拾ってもらう形で何とか職に就くことが出来ました。英国滞在が長いので、就職活動している頃には永住権があったものですからこういうことも可能だったわけですが、ビザの条件がどんどん厳しくなっている昨今の状況はもっと厳しいだろうと思います。

勤務先は前述のように音楽作品の学術的分析を中心に行うところであり、日本の音大に想起されるような華やかなイメージのものではありません。教員も学生も過半数が男性ですし、さらに専任教員の中でヨーロッパ人ではないのは私だけです。そのような状況下、これまで、私が女性でなければ、あるいは非白人でなければ起こらなかっただろうという問題が全くなかったわけではありません。西洋音楽といういわば西洋人のカルチュラルアイデンティティの核心にある分野に、非白人が斬り込んでいくこと自体の難しさが先ずあるようにも思います。しかし、学生から、あるいは同僚からの信頼は「得る」というより「勝ち取る」ものなのだというスタンスで日々臨むように心がけています。

勤務先ではInternational Admissions Tutor(外国留学生の入試係、パストラルチューター)の職務にあります。留学生、特に東洋からの留学生に関しては勤務先に請われるまでもなく、自分の経験からも出来るだけの援助をしたいと思っています。私自身が日本とイギリスとで高等教育を受けたおかげで世界が大きく広がったと思いますので、次代を担う日本の学生にも引き籠らずにそういったチャンスを活用して欲しいと願っています。それから、昨今日本の人文学でも、英語で研究発表することが重要視されるようになっていますが、日本の若い音楽研究者には言語毎に独自のリサーチカルチャーがあるのだということも申し上げたいです。例えば、イタリアやドイツが史料研究重視であるのに比して、英語圏の音楽学は明確にArgument-drivenであり、研究内容から引き出される理論的な結論が要求されます。研究調査して書き上げた報告を英訳すればそのまま受容されるというようなものではないかもしれないということは押さえておいて欲しい点だと考えています。

日本とイギリスを繋ぐお手伝いがしたいという願いは常にあり、2013年度にはJSPS Symposium Scheme for Japanese Researchers based in the UKに採択頂き、5名の日本人研究者

をロンドンに招聘して「Safeguarding the Intangible: Cross-Cultural Perspectives on Music and Heritage」と題する国際シンポジウムを開催しました。折しも勤務先がAsian Music Unit(アジア音楽研究所)を開設しようとしていたときで、そのオープニング行事の一環としてたくさんの方にご来場頂き、成功の裡に終了することが出来ました。現在はこのシンポジウムの成果の一つとしての論文集の出版準備に携わっているほか、この時に繋がりが出来た大阪大学文学研究科音楽学研究室と学術研究提携を結び、さらなる交換を進めています。この4月にも阪大とレクチャーコンサートを共催するため、同僚と共に日本を訪れました。

近年、研究、教授活動に加え、こういった対外的なイベントのオーガナイズにも係わって来ましたが、今後は特に研究のアウトリーチ活動に力を入れていきたいと思っています。この7月には自分の専門分野である「オペラにおける狂乱の場研究」を発展させ、数名のイギリス人、日本人研究者の協力を得て、初期近代における「狂気」「逸脱」というものを多分野的(歴史プロパー、医学史、哲学史、文学史、音楽史など)に考察し、それをトークとコンサートで一般に伝えるというプロジェクトを始動することになっています。近年、人文学が「役に立たない」という理由でやり玉にあがっていますが、その背後には人文学者が何をやっているののかなかなか一般には見えにくいという問題が挙げられるかと思ひ、それを打破したいという願ひがあります。さらに、役に立たない人文学が集って、どのような「知的収穫のあるエンターテインメント」を提供できるかを問うという挑戦でもあります。このプロジェクトはまだごく初期段階ですが、今後長期に渡って、日本とイギリス双方で展開していけるように頑張りたいと思っています。



ゴールドスミスカレッジ音楽学部、大阪大学文学研究科音楽学研究室共催セミナーにて。左から5番目が筆者。

| 英国の大学紹介

英国西南の雄～カーディフ大学～

カーディフ大学は芸術・人文・社会学、生物医学・生命科学、物理工学の3つのカレッジから成り、その傘下に25のスクールを擁する大規模総合大学である。また、ウェールズ地方に位置する大学のうち唯一英国研究型大学グループであるラッセルグループに所属し、2017年Times Higher Education Ranking 46位と世界大学ランキングでもトップクラスに位置づけられている著名大学である。

ウェールズ出身の学生は、世帯収入に関わらず授業料が半額になることもあり、約3分の1の学生が地元ウェールズ出身者である。一方でカーディフ大学は100以上の国より学生を受け入れており、現在学生総数のうち14.3%が留学生で占められている。また、学生に対するサポートも手厚く、カーディフ市各地に宿泊施設を抱え、計5,000人以上の学生の収容を可能としており、就学1年目の学生は一定の条件を満たせば居住場所が保証されている。この他にも現在ワンストップ学生相談所や学生組合を収容するCenter for Student Lifeの建設が計画されている。実際、英国の学生生活に関する全国調査であるNational Student Survey (NSS)では87%のカーディフ大学の学生がキャンパス生活に満足しているとのことである。

また、研究活動においても、過去2名のノーベル賞受賞者(Sir Martin Evans(医学・生理学賞)並びに Robert Huber(化学賞))を輩出している他、土木工学、建築工学分野は政府による大学の研究実績に対する評価制度であるREF2014においてquality全国1位の座を獲得している。他にも、2013年にバース大学、ブリストル大学、エクスター大学と共にGW4と称するコラボレーションスキームを立ち上げている。これは加盟大学間にて外部資金獲得、博士課程学生教育、研究施設共用等を行うことを目的とした枠組みであり、これまでに本スキーム下で3億7千万ポンド以上の外部資金を獲得しているとのことである。

さらに、カーディフ大学は日本を含む30以上の国に拠点を持つSIN(UK Science and Innovation Network:英国政府国際活動支援ネットワーク)へ参画しており、同大学国際欧州担当副学長Prof.Nora de Leeuwの話によれば、今後本ネットワークを活

用し日本の大学も巻き込み、国際異分野共同研究を推し進めたいとのことであった。

カーディフ大学の近年の意欲的な取り組みとしては「Language for all」プログラムが挙げられる。これは学部生、院生問わず無料で9つの言語(アラビア、仏、独、伊、日本、中国、葡、露、西)を学ぶことができるプログラムであり、学生の国際的な視野を醸成する目的で開始されたものである。週2-3時間9週にわたって授業外の時間を活用して行われる通常コースと1日4時間5日連続で行われる集中コースの2種類が用意されており、他にも独学者用に大学構内図書館にLanguage Hubと称する各国の新聞、書籍、映画、ドラマ等DVDを鑑賞できるスペースを設け、オンライン言語学習コースの提供も行っている。

研究、教育ともにバランスの取れた大学としてカーディフ大学はウェールズにおいても国際的にも、今後益々存在感を増していくのだろうと感じた。(国際協力員・三田太郎)



カーディフ大学 Hadyn Ellis Building

大学基本情報	
学生数	学部生21,575名/院生8,905名
留学生	14.3%
キーワード	ウェールズ、GW4、Language for all、ラッセルグループ
学術交流を行っている日本の大学	京都大学、神戸大学、横浜国立大学、岡山大学、三重大学、慶應大学、国際基督教大学、同志社大学、関西学院大学、明治大学
Alumni	10名(JSPS同窓会員)
JBUK	4名(在英日本人研究者等)

| 英国の大学紹介

日本研究が盛んな英国の大学 ～シェフィールド大学の場合～

2017年2月24日、シェフィールド大学にて、日本研究に従事するPhD学生のためのBAJS/Japan Foundation Postgraduate Workshopが開催された。今年度は、英国の大学院生(在英日本人学生を含む)が各自の研究を振り返ると共に、「研究のインパクト」についてディスカッションを行った。JSPSも本イベントに参加し、事業説明を行った。今回は本イベントで訪問したシェフィールド大学について紹介したい。

シェフィールド大は、1828年に設立されたシェフィールド医学学校等が起源となり、1905年に国王の勅許(Royal Charter)を与えられたことにより、正式に大学となった。シェフィールド大は英国の研究評価制度(REF: Research Excellence Framework)にて、大学の行う研究の85パーセントが「世界を牽引する」あるいは「国際的に優れたレベルである」と評価され、その中でもBiomedical Sciences, Control and Systems Engineering及びHistory and Politicsの分野は特に強く、いずれも国内トップ3と評価される英国屈指の名門大学である。

我々の身近なところで言うと、SOAS(ロンドン大学)やケンブリッジ等と並んで、日本研究が盛んな大学の一つとしても知られる。協定を締結し、学生交流を実際に行っている日本の大学も多いのではないだろうか。通常英国の大学の学士課程は3年で修了である。しかし、英国の多くの地域研究のコースでは、課程の途中で海外留学を挟むことが多い。1,2年に英国の大学に所属した後、3年目で協定校へ交換留学をし、4年目に英国の大学に戻り、残りの課程を終え、修了となるものである。シェフィールド大の日本学科もこの手法を採用しており、実に29もの日本の大学との学生交流協定を締結し、学生はこれらの大学から3年目の交換留学先を選ぶことができるのだ。筆者が英国の大学関係者と交流する中で、シェフィールドの日本学科の卒業生は非常に日本語が堪能であるという話を伺ったことがある。その理由についてシェフィールド大の関係者に伺っても、「これ」といった回答を得ることはできなかったのだが、実際に、最終学年の学生はJLPT(日本語能力試験)で最高レベルのN1を取得することが珍しくないとのことだ。

シェフィールド大の日本研究について歴史を紐解くと、第二次世界大戦後に遡る。英国における日本研究はSOASを中心として、大戦中の軍事上の必要性、とりわけ語学面の必要性から

発展していった。しかし、終戦後、従来の言語学のみならず、現代研究を含む関連諸分野を含めた東洋学の必要性が指摘され、1960年代の高等教育拡大期において、各地に地域研究センターが設立されるに至った経緯がある。例えばリーズ大の中国研究センターやハル大の東南アジア研究センターなどがそれにあたる。日本研究センターが置かれたのがシェフィールド大であった。それ以来、シェフィールドでは包括的な日本研究が発展していった。

学生交流に話を戻すと、日本研究に端を発する学生交流はより強固な日英交流の足がかりになりうる。彼らを交換留学生として受け入れることで、逆にシェフィールド大に日本の学生を派遣することが可能となる。(大学間協定に基づく交流であれば、個別の取り決めにもよるが、基本的に日本から派遣する学生の分野は自然科学・応用物理系など、全く違う分野でも問題ない。) また、JLPTのN1取得=日本語で授業が受けられるレベルであり、日本の大学院等への正規留学の道も大きく広がる。日本研究に従事する教員や学生は総じて日本の心強いサポーターでもあり、彼らとの交流を大切にしていきたいと願うばかりである。

(国際協力員 楠根由美子)

キャンパス中心に位置するファース・コート。シェフィールドの鉄鋼業者で大学の創立に寄与したマーク・ファースにちなんで名づけられた。



大学基本情報	
学生数	学部生17,995名/院生6,290名
留学生	21.5%
キーワード	日本研究、サンドイッチ・プログラム、交換留学、マーク・ファース
学術交流を行っている日本の大学	29大学 http://www.sheffield.ac.uk/polopoly_fs/1.574907!/file/Exchange_Partners.pdf (Sheffield大HPより)
Alumni	18名(JSPS同窓会員)
JBUK	7名(在英日本人研究者等)

● ぽりーさんの英国玉手箱 ●



Q 英国人のテレビ事情

最近通勤時に自分のスマートフォンやタブレットでTVや映画を見ている人をよく見かけるようになったのですが。



A テクノロジーの発達で、テレビや映画などの日常の娯楽に変化が出てきています。スマートフォンやタブレットは、今やテレビや映画を見るのに必須アイテムとなりました。以前は、好きな番組を見逃したくないのであれば、放映時間にTVの前にいるか、録画しか方法はありませんでしたが、そんなことはすでに昔の話となっています。

2007年7月にBBCがネットで過去の番組を見ることができる“iPlayer”というサービスを開始しました。2012年10月にテレビが地上波からデジタルに完全移行されると、BBC以外の各放送局もiPlayerのような“On Demand”という過去の番組を鑑賞できるネットサービスを開始。またテレビ放映では、メインの放送より1時間遅れで放送される“+1”サービスも開始されました(例: Channel 4の場合、Channel 4+1というチャンネルで1時間遅れてまったく同じ番組が放送される。)同じころ、通信会社によりインターネットの容量無制限サービスが拡大されてきて、TV番組や映画などを月額(月額)でダウンロード可能なストリームサービスがとてポピュラーになってきました。わかりやすいところでAmazon PrimeやNetflixが代表例です。それぞれドラマシリーズやドキュメンタリー、映画などを自分の好きな時間に見ることが可能で、スマートフォンやタブレット、コンピュータにダウンロードしておけば外出中にもドラマが見られるのです。映画も以前は劇場に最新映画を見に行くか、多少古いものであればDVDを近所のレンタル屋で借りるか、購入するしか方法がな

かったのですが。今では通勤途中の電車で、出張、旅行の際に飛行機で、又ジムでエクササイズしながら楽しんでいる人をたくさん見かけますね。

この方法だと、すでにシリーズが終了したドラマでも最初からすべてのエピソードを一気に鑑賞することが可能です。1話が大体1時間ぐらいなので時間を自分で管理できるという利点もありますが、好きなドラマだとハマってしまい、一気に見てしまいたくなる衝動に駆られ夜更かしをしてしまうという欠点(?)もあります。私が現在ハマっているドラマは“Man in a High Castle”で、現在シーズン2まで終了し、シーズン3が今年放映予定で今から待ち遠しいです。

こうなるとDVD自体を所有しなくていいんですね。今、家にあるDVDはどうしましょう。場所をとるけど、捨てるのはもったいない。私はCEXのサービスを利用しています。英国内でも320店舗以上を持つ中古のDVDやコンピュータ、スマートフォンの売買をするチェーン店です。手持ちのDVDを持ち込めば現金化も可能ですが、気に入ったDVDを破格の値段(AmazonやNetflixより安いです)で購入も可能です。CEXは現在とても英国で流行っています。

こんなに便利になった世の中ですが、過去の同僚が、日本に帰国後BBCの番組を見たくてiPlayerを利用しようとしたらできなかつたと嘆いていました。まだまだ改善の余地がありそうですね。また、これからどんなテクノロジーを駆使したエンターテイメントが普及するか楽しみでもあります。

| Recent Activities

第5回 立命館セミナー・シリーズ (JSPSロンドン後援)

「股のぞき」の姿勢がもたらす視覚世界の変化と心理的現象について～東山篤規教授、第26回イグ・ノーベル賞受賞記念講演

SOAS, University of London
2017年02月24日 (金)

立命館大学が、海外における情報発信と立命館大の研究内容を広く一般の方々と共有することを目的として、2015年から実施しているセミナー・シリーズ。第5回目となる今回のセミナーについて、立命館英国事務所の坂本純子所長にご報告いただきました。

2015年よりロンドンでセミナー・シリーズを主催している立命館英国事務所は、2017年02月24日に文学部の東山篤規教授を迎え、事務所のあるロンドン大学SOASにてセミナーを実施しました。

東山教授は「触覚と痛み」そして「空間知覚」を研究テーマに、人間の感覚・知覚に関する研究を行ってきており、昨年9月に第26回イグ・ノーベル賞を受賞しました。イグ・ノーベル賞は、人々を笑わせ同時に考えさせる業績を称える賞です。毎年の授賞式はハーバード大学で開催され、日本人の受賞は10年連続となります。過去には、イグ・ノーベル賞とノーベル賞の両方を受賞した研究者もいます。

東山教授の受賞は、「光学的・身体的変換視野の効果(股のぞき効果)」に関する研究に与えられたものです。「股のぞき」によって視野と上体を逆さまにすると、視野が平面に見え、とくに



天の橋立にて



講演する立命館大学 東山篤規教授

遠くの物が小さく接近して見えるという現象の解明が対象となっています。この現象の代表的な事例として京都府の『天の橋立』で砂嘴(さし)を股のぞきしてみると、砂嘴が橋のように空にかかっているように見えることが挙げられます。実験によって、これは網膜像の上下ではなく上体の上下の逆転が原因で視覚世界が変化することによって生じることがわかりました。

これらの現象の解明を、膨大な研究データを示しながら、なおかつ一般の方々にも理解していただきやすいようにビジュアルも駆使して、当日のセミナーが行われました。当初は研究者以外の方々にも果たしてどれくらいの関心を持って頂けるのか、少し不安を感じておりましたが、フタを開けてみれば参加希望者が殺到して会場の変更を余儀なくされるほどの大盛況でした。

セミナー後に行われたレセプション会場でもなお、東山教授を囲んで研究者以外からも質問が飛び交い、英国内における知的好奇心の高さを実感した夕べでした。

お越し下さった皆さま、後援して下さったJSPSロンドンの方々をはじめご支援下さった皆さまに心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました！

| Recent Activities

Pre information event for JSPS fellows Pre Departure Seminar and Networking Evening

JSPS London
Friday, 21st April 2017

A seminar combining a Japanese class for beginners and information about preparations for a research trip to Japan was organised by JSPS London. Participants included recent awardees of several types of JSPS Fellowships.

After the seminar, we got further participants to a networking evening held by the UK & RoI JSPS Alumni Association.



Pre Departure Seminar and Networking Evening participants

The seminar started a Japanese language class for beginner's level. The teachers were Mr. Makoto Netsu, Chief Japanese language Advisor and Ms Kanako Ukai, Assistant Japanese Language Advisor both from The Japan Foundation London. This lesson covered words and phrases for practical everyday situations both for living and working in Japan including self-introductions in order that fellows are able to simply explain about their research area. Basic language to be able to shop, order food and make travel arrangements while in Japan was also taught as well as an introduction to reading hiragana and katakana.



The Japanese language lesson

After a short break, the next segment of the seminar began and included formal presentations on pre departure preparations from JSPS staff and Alumni. This session started with welcoming remarks from the Director of JSPS London,

Professor Nobuo Ueno and was followed by a short self introduction from each participant. The purpose of these self-introductions was for fellows to link similar areas of research and institutions being visited overall. In this group our fellows will be visiting a varied array of departments at top universities and research institutions all over Japan, from the Centre for Organic Photonics and Electronics Research at Kyushu University in the south, to the Slavic-Eurasian Research Center at Hokkaido University in northern Japan. The seminar was presided over by Ms. Polly Watson, International Programme Coordinator of JSPS London, who at first explained the purpose of the event and about the different presentations that were to follow. The first presentation by Ms. Chika Itoi, Section Leader of the Overseas Fellowship Division at the JSPS Tokyo headquarters, gave an essential introduction to JSPS, the preparation JSPS researchers need to make and kinds of assistance available from JSPS. Mr. Jun Hiramoto, who is in charge of the Summer Programme at JSPS Tokyo, gave the next presentation about preparations specifically for the Summer Programme and also included generic information on the procedure for booking flights, receiving funds and travel insurance applicable to all JSPS Fellows. Two JSPS UK & RoI Alumni Association members spoke next about their experiences of research environments and living in Japan. Mr Szymon Parzniewski from the University of Birmingham and a JSPS Summer Programme Fellow in 2016, gave advice about getting the most from this fellowship and being open minded to trying new things and approaches both to daily life and

| Recent Activities

research. Professor Gary Stephens from the University of Reading, spoke about his long and impressive research track record with Japan and how being awarded several sources of JSPS funding has helped to build his research networks in Japan as well as the importance of being actively involved with the UK and RoI JSPS Alumni Association to maintain these links.

JSPS London was also pleased to have in attendance guest speakers Ms. Julie Anne Robb from the Japan Foundation and Mr. Rory Steele from the Great Britain Sasakawa Foundation. Both gave presentations on the activities of their organisations to make seminar participants aware about further funding opportunities they offer to do research in Japan.

After the pre-departure seminar, the UK & RoI JSPS Alumni Association held a networking evening to include Japanese researchers based in the UK as well, that allowed for networking among members and new JSPS fellows in a relaxed atmosphere. The evening started with a presentation from the newly appointed Chair of the UK & RoI JSPS Alumni Association, Dr. John Fossey, based at the University of

Birmingham, to explain about the recent and future activities of the Association, including recent awards made under the BRIDGE Fellowship and Symposium Scheme as sources of funding available exclusively to Alumni Association members. This presentation was followed by a drinks reception and buffet to allow for networking and the chance for further information exchange between new fellows, Alumni and Japanese researchers in preparation for their trips to Japan.



Networking Evening participants: both Japanese and UK researchers enjoy discussions.

Comments from attendees:

"I am only a second year PhD student with limited academic experience, and so I felt rather anxious about the prospect of conducting research in a foreign country. Attending the JSPS event in London in April and hearing from JSPS alumni helped me to feel more at ease with the process of moving to Japan. I am also glad to have met the other students on the program, who I plan to stay in contact with in Japan in order to exchange experiences and advice."

Mr Sam Hatfield (University of Oxford), 2017 Summer Programme Fellow

"I much appreciated the pre-departure seminar, and learnt a lot that will be useful for our visit. I'm past that stage of my life where the information about sources of funding and follow-on activities would be of much personal interest, but I'm sure that part of the day was valuable for the younger participants. It was also very helpful that my wife was able to take part in the seminar as well. We both very much enjoyed the Japanese food at the reception, and we talked to many interesting people."

Professor Emeritus Stephen Robertson, (City University London), Short Term S Invitation Fellow

In order to strengthen the academic linkage between the UK and Japan, it is a good idea to invite an early career researcher from Japan in your lab. The following programmes give the opportunity for Japanese researchers to conduct joint research activities in international environment in overseas including the

UK. These programmes cover all the research fields of humanities, social sciences and natural sciences. If you wish to apply for them, please note that Japanese researchers should make an application to JSPS.

Programme Matrix



❖ To Host Early Career Researchers (PhD students, Postdocs and young PIs)

● Overseas Challenge Programme for Young Researchers



Duration	3-12 months
Annual quota	Around 140
Support	Return air ticket, living expenses and bench fees
Website	https://www.jsps.go.jp/english/e-abc/index.html

*It is allowed to gain this programme and "Research Fellowships for Young Scientists" at the same time.

● Research Fellowships for Young Scientists

Duration	2-3 years
Annual quota	Around 2,350 (FY2016)
Support	Return air ticket, living expenses and research allowance
Website	http://www.jsps.go.jp/english/e-pd/index.html

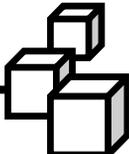
● Overseas Research Fellowships

Duration	2 years
Annual quota	185 (FY2016)
Support	Return air ticket, living expenses and research allowance
Website	https://www.jsps.go.jp/english/e-ab/index.html

❖ To Host Young PIs

● Grants in Aid for Scientific Research (KAKENHI) -Fostering Joint International Research

Duration	6-12 months
Annual quota	Around 360 (FY2016)
Support	Travel expenses and accommodation fees, research funding and cost of replacement staff at Japanese institutes
Eligibility	36 to 45-year-old PIs who have already gained KAKENHI grants
Website	https://www.jsps.go.jp/english/e-grants/index.html



Events organised/supported by JSPS London from February to April 2017

2nd February 2017

London Theatre Seminar 'Early 20th Century Transcultural Popular Entertainment in the British and Japanese Theatre: From Edwardian Musical Comedy to Teigeki Actress Plays'
at the University of London Senate House, supported by JSPS

7th February 2017

Public Lecture 'Giovanni Vittorio Rosi's Musical Theatre: Opera, Operetta and the Westernisation of Modern Japan'
at Goldsmiths, University of London, supported by JSPS

15th February 2017

JSPS Programme Information Event
at the University of Hull

16th February 2017

JSPS Programme Information Event
at Coventry University

21st February 2017

JSPS Programme Information Event
at London South Bank University

22nd February 2017

The 12th JBUK Meeting "UK Survival Seminar"
at JSPS London

24th February 2017

Ritsumeikan Seminar
"Changes in the Visible Field Caused by 'Between-legs' Viewing and the Psychological Phenomena Associated Therewith"
at SOAS, University of London, organised by Ritsumeikan University, supported by JSPS

24th February 2017

Japanese Studies Postgraduate Workshop 2017
at University of Sheffield, organised by the Japan Foundation and British Association for Japanese Studies
(JSPS gave a talk on JSPS fellowship programmes at the workshop.)

1st March 2017

JSPS Programme Information Event
at Liverpool John Moores University

9th March 2017

European and International Research Event
at Cardiff University
(JSPS gave a talk on JSPS fellowship programmes at the event.)

15th March 2017

JSPS Programme Information Event
at the University of Bradford

12th April 2017

JSPS Programme Information Event
at the University of Westminster

21st April 2017

JSPS London Pre Departure Seminar and Alumni Evening
at JSPS London

Vol.7 Dr Felix Rösch



At the Sapporo Autumn Festival with a local dressed in a traditional Bavarian dress

This time, Dr Felix Rösch looks back on his experience of being a JSPS Fellow. His 2-month fellowship on a JSPS Summer Programme in Japan was a dramatic turning point of his research career, he is quoted as saying. The senior lecturer at Coventry University tells us about his encounter with Japan, which has led to his current, strong collaboration with Japanese researchers!

Inspired by a small book by the brilliant Austrian publicist Robert Menasse, I chose *The Permanent Revolution of Concepts* as the title for a talk I gave at the concluding conference of the JSPS Summer Programme 2010. Back then, on this hot summer day in Shinagawa, reflecting on my experiences, I had not nearly grasped how much this two month stay in Japan would affect my future research interests. I had sensed, however, that my experiences had provided me with practical insights what I studied theoretically in my doctoral thesis: knowledge is context-sensitive and – to allude to Edward Said – it is affected when it travels across time and space.

Although I had strong personal interests in Japan, particularly in its woodblock-prints, literature, and cinema, I had little hopes when I submitted my application for the JSPS Summer Programme, as my research at that time had nothing to do with Japan. Working on a German-American international political

theorist of the twentieth century, Hans Morgenthau, the only connection to Japan I could draw in my application was that Morgenthau had attended an international peace conference in Japan, taking place in the same year as the Tokyo Olympics. But perhaps, being out of the ordinary helped my application, as I was the only political scientist and indeed one of the very few social scientists, participating in the programme that year.

Having no research connection to Japan and no network, it took me considerable time to find a professor, willing to accept me as a visiting researcher. Fortunately, Professor Chieko Kitagawa Otsuru agreed to host me at Kansai University in Suita at the outskirts of Osaka. In these two months at Kandai's Faculty of Law, Professor Otsuru showed a level of kindness and support that since then I could experience so many times with Japanese colleagues. Having done archival research at the Library of Congress in Washington D.C. the summer before, my

Dr Felix Rösch

Senior Lecturer in International Relations,
School of Humanities, Faculty of Arts and Humanities,
Coventry University

Biography

- 2001-2006 MA Political Science, Economics, Intercultural Business Communication, Friedrich-Schiller University Jena, Germany
- 2003-2004 Diplôme du Programme International, Sciences Po Paris, France
- 2006-2007 MA International Studies, Newcastle University
- 2008-2011 PhD Politics, Newcastle University
- 2009 Visiting Scholar, Center for Transatlantic Relations, Paul H. Nitze School of Advanced International Studies, Johns Hopkins University, Washington D.C., USA
- 2010 Visiting Scholar, Faculty of Law, Kansai University, Osaka (JSPS Summer Programme)
- 2012- Senior Lecturer, School of Humanities, Coventry University
- 2013 Visiting Scholar, Institute of International Relations, Tokyo University of Foreign Studies

JSPS Concerning

- 2010 JSPS Summer Programme

plan was to use these materials and draft the final chapter of my PhD in Japan. However, it was not without worries, as I feared that early twentieth century German legal and philosophical texts that I needed in addition to the archival records would be unavailable in Japan. After all, why should it be easier for me on the other side of the world if it was already difficult to access these materials in the UK? Most of them exist only in the British Library in London. Fortunately, it turned out that my concerns were ill-founded. Kansai University has an amazing library, containing all the books that I needed. Considering that one of these books, Morgenthau's own PhD thesis from 1929, barely sold a hundred copies when it was published, this is remarkable.

Given that I had the unique opportunity to spend several months in Japan, I also wanted to learn more about Japanese culture and society. Being an international political theorist, my first port of call was Japanese contributions to political thought. In my search, I stumbled across a collection of essays by Maruyama Masao, put together in a little orange book titled *Thought in Japan* (Denken in Japan). At the time I was reading this book, I did not know that Maruyama was the doyen of Japanese political science in the twentieth century, holding a similar status like his coeval Morgenthau for International Relations. What surprised me, however, was the realisation that Maruyama was concerned about similar themes and concepts than Morgenthau, albeit looking at the world from a very different perspective. Both, however, were influenced by Continental European thought and it was particularly the Hungarian sociologist Karl Mannheim, who became decisive for Maruyama and Morgenthau. It was this *mega thaumazein*, a congruity in difference, that I did not expect which subsequently informed my research interests. I have published a paper in the *Journal of International Political Theory*, in which I elaborate a common method that Maruyama and Morgenthau used in order to study political thought. I call this method unlearning. This method, as I have argued, signifies not an attempt to forget, but a learning process to free oneself from the modern imaginary that preconditions everyday knowledge and intellectual thought by opening up new spaces to imagine a different reality. My interest in Maruyama brought me in contact with Dr Atsuko Watanabe from the University of Warwick, whom I first met at a workshop at Newcastle University in 2013. She also works on Maruyama and our common interest subsequently led to a paper published in the *European Journal of International Relations*, in

which we discuss one of the concepts – basso ostinato – that Maruyama developed in order to understand the unsynthesizable cognitive void between the self and the other.

Hence, it was the JSPS Summer Programme that triggered my interest in Japanese political thought and it allowed me to start building a research network. Since finalising my PhD in Newcastle and starting to lecture at Coventry University, I had further opportunities to do research in Japan and, in 2013, I even presented my work at the Japanese Political Studies Association Conference in Sapporo. Currently, Dr Watanabe and I are editing a book that introduces Japanese political thought to International Relations by looking at encounters of difference between Japan and the Western World since the end of the Tokugawa Shogunate. Amongst others, we collaborate in this project with Professor Kosuke Shimizu (Ryukoku University), whom I first got to know at a talk that I gave for the Kansai University-Kwansei Gakuin University Seminar in Osaka in July 2010. A workshop was organised in Kakunodate (Akita Prefecture) last year that brought all the collaborators from the UK, USA, and Japan for this project together. Results of this project will be published with Rowman & Littlefield in their *Global Dialogues: Developing Non-Eurocentric IR and IPE* series next year.

Come think of it, this little orange book that I read during the JSPS Summer Programme opened new (research) worlds for me and, with the help of colleagues from the UK and Japan, led to a fusion of horizons, as the German philosopher Hans-Georg Gadamer would have called it, that I could never have imagined.



Presenting at the Annual Conference of the Japanese Political Studies Conference

JSPS Fellowship Programmes

*These application periods are for the head of the host institution to submit applications to JSPS Tokyo; the time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers.

◆ Postdoctoral Fellowship Programmes (Short-term/ Standard)

Short-term for North American and European Researchers

Call for FY2017 (4th Recruitment)

Duration: 1 to 12 months

Application Period: 05- 09 JUN 2017

Commencement: 01 Jan 2018– 31 Mar 2018

<http://www.jps.go.jp/english/e-fellow/application.html>

*JSPS London also receives applications for Postdoctoral Fellowship (Short-term) twice a year, usually in June & December.

Call for FY2017 (2nd Recruitment)

Applications need to be sent JSPS London DIRECTLY.

Application deadline: 01 June 2017

Commencement: 01 NOV 2017 – 31 Mar 2018

<http://www.jps.org/funding/>

Standard

Call for FY2018 (1st Recruitment)

Duration: 12 to 24 months

Application Period: 28 AUG to 1 SEP 2017

Commencement: 01 APR to 30 SEP 2018

<http://www.jps.go.jp/english/e-fellow/application.html>

*JSPS also receives applications for Standard fellowship through nominating authorities in the UK. For information on the application procedure, please contact directly the nominating authorities which are **The Royal Society** (for the natural and physical sciences/ application deadline: usually MAR every year) and **British Academy** (for all fields of the humanities and social sciences/ application deadline: usually DEC every year)

RS: <https://royalsociety.org/grants-schemes-awards/grants/jps-postdoctoral>

BA: <http://www.britac.ac.uk/jps-postdoctoral-fellowship-programme-overseas-researchers>

◆ Invitation Fellowship Programmes (Long-term/ Short-term/ Short-term S)

*These programmes are designed to enable Japanese researchers to invite their overseas colleagues to Japan to participate in cooperative work and other academic activities. Researchers of all countries having diplomatic relations with Japan are eligible.

Applications are submitted by the inviting researchers who wish to host overseas researchers in Japan.

JSPS offers three Invitational Fellowships, which are Long-term programme for lecturer to professor level, Short-term for reader and professor etc. level, and Short-term S for Nobel laureate level. Please check JSPS website as below for more details.

Call for FY2018 (1st Recruitment)*

Long-term

Duration : 2-10 months

Short-term

Duration: 14 to 60 days

Short-term S Duration: 7 to 30 days

*Long-term has only one recruitment a year.

Application period: 28 AUG to 1 SEP 2017

Commencement: 01 APR 2018 to 31 MAR 2019

<http://www.jps.go.jp/english/e-inv/index.html>

◆ For Alumni and JBK members' funding calls

***Bridge Fellowship**, which is for Alumni members, usually dead line is March every year.

***JBK Japan Award**, which is for JBK members' usually dead line is usually March every year.

<http://www.jps.org/funding/2017/01/application-guidelines-for-the-jps-london-jbuk-japan-award-2017.html>

JSPS London Events & Useful Information

◆ Symposium and Seminar

- Tenko in Trans-War Japan : 30 JUN to 2 JUL 2017 at University of Leeds
- Magnonics 2017: 07 to 10 AUG 2017 at Oxford University

◆ JSPS Programme Information Event

- On 27 JUN 2017 at Durham University
 - On 28 JUN 2017 at Newcastle University
 - On 05 JUL 2017 at University of East Anglia & North Science Park
 - On 14 JUL 2017 at Research Forum, Harper Adams University
- For more information : <http://www.jps.org/event/index.html>

*JSPS London visits universities in the UK time to time, to have a Programme Information event to introduce and explain our funding programmes. If you have any interest, please contact

JSPS London. (contact : enquire@jps.org)

◆ Useful Information

For Japanese researchers in the UK/ 在英日本人研究者の皆様ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。対象は、英国の大学機関に所属する研究者(ポスドク・大学院生含む)及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jps.org/members/?page=regist>

JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly (学振便り)は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです(日本語のみ/購読無料)。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<http://www.jps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)
14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom
Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669
E-mail : enquire@jps.org | <http://www.jps.org>



JSPSニュースレター
監修: 上野信雄
編集長: 大萱千草
編集担当: 松村彩子